

日本赤十字社の創立と 赤十字ゆかりの地

佐藤雅紀 著



日本赤十字社 社屋



明治時代（飯田町時代 絵葉書より）



旧社屋（大正元年～）



現在の社屋（昭和52年～）



大給恒
(『大給龜崖公傳』所収)



佐野常民
(『佐野伯略傳』所収)



昭憲皇太后 (筆者所蔵)



橋本綱常
(『橋本綱常先生』所収)



花房義質
(絵葉書より 東京圖按印刷社出版部浪華屋)

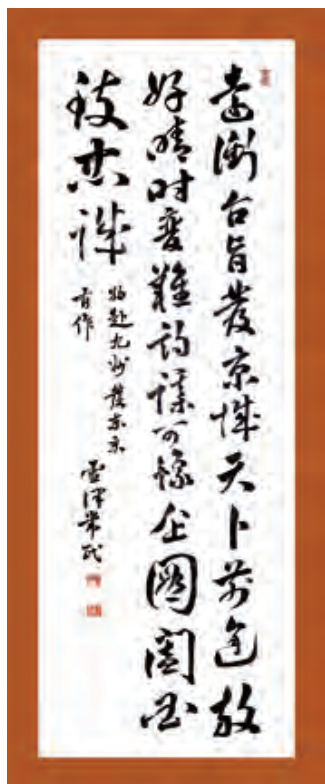


有栖川宮熾仁親王 (日本赤十字社所蔵)



小松宮彰仁親王 (筆者所蔵)

佐野常民書（筆者所蔵）



遠衡台旨發京城
春色尤瀟酒
天下前途放好晴
野梅開竹涯
時變難期謀可豫
殊憐紙窗月
企圖闔國致忠誠
一朵寫吾詩
將赴九州發東京
明治戊申（二八年）
有作
雪津常民
龜崖恆

大給恒書（筆者所蔵）



橋本綱常書（筆者所蔵）



安心是（これ）藥、更に方（てだて）無し
丁未（明治四〇年） 秋 日 綱常書

日本赤十字社の創立と 赤十字ゆかりの地

佐藤雅紀 著

日本赤十字国際人道研究センター

はじめに

長年、日本赤十字社に勤務して、日本赤十字社（本社）奉仕課長をはじめ、日本赤十字社東京都支部振興部長等の役職を歴任し、東京都赤十字血液センター副所長を最後に定年退職しました。

その後、日本赤十字社非常勤嘱託（企画広報室）として『日本赤十字社史稿』第一巻の執筆編纂等に携わるとともに、本社内にある「赤十字情報プラザ（展示・図書・資料室）」のボランティア（職員OB）として、資料の調査、整理、明治期からの墨で書かれた記録（古文書）の解説、職員への助言等を行ない、二〇二五年三月に八五歳で引退しました。

二〇二四年には、「赤十字情報プラザ」に保存されている原資料がデジタルアーカイブズで公開されたので、今後は研究者が増えることを期待しますが、幸運にも職員としての経験と一五年間のボランティアを通じて原資料に直接ふれる機会が多かったので、二〇〇〇年に発行した小著『歴史探訪 日本赤十字社の創立』を二五年ぶりに全面改訂して、『日本赤十字社の創立と赤十字ゆかりの地』として更新版を出版すること

にしました。

本書は、「赤十字情報プラザ」に保存されている簿冊等の原資料（一次資料）を基本に書き下ろしているので、公式記録とされる『日本赤十字社史稿』等の二次資料と記述が異なる部分があります。

本書は、日本赤十字社の二人の創立者佐野常民と大給恒および日本赤十字社の前身「博愛社」の創立経緯と西南戦争における博愛社の救護活動に焦点を当てて、明治期における主な活動を加えて日本赤十字社の発達経緯を紹介したもので、日本赤十字国際人道研究センターの好意によって出版するものです。

二〇二七年は、日本赤十字社創立一五〇周年に当たります。

本書によって、日本赤十字社の創立と発展に挑んだ関係者の信念と情熱を知っていただき、日本赤十字社の歴史や活動に興味を持っていただけると幸いに存じます。

目次

はじめに 2

第一章 日本赤十字社の創立者 佐野常民と大給恒

佐野常民 7

万国博覧会 30

大給恒 35

第二章 西南戦争と博愛社の救護活動

西南戦争 43

博愛社の創立 49

博愛社の救護活動 62

第三章 ジュネーヴ条約の加盟と日本赤十字社

ジュネーヴ条約への加盟 92

日本赤十字社 95

病院の設立と看護婦の養成 100

日本赤十字社篤志看護婦人会 108

第四章 日本赤十字社の活動

災害救護と戦時救護 109

第五章 佐野常民と大給恒の晩年

最後の出張と妹との再会 117

日本赤十字社創立二五年紀祝典 121

佐野常民の人柄 124

大給恒の人柄 132



唐澤山神社

佐野常民

佐野常民の家系

佐野常民の家系は、栃木県佐野市にある関東で最大級の山城の一つで高石垣が有名な唐澤山（唐沢山）城主からの分家である。

唐澤山（唐沢山）城主からの分家である。

J R 宇都宮線小山駅から J R 両毛線に乗り換える

と、佐野駅（栃木県佐野市）があり、東武佐野線の佐野駅から一時間に一〜二本の葛生駅行きに乗ると、一〇分程で田沼駅に着く。

東武浅草駅（東京都台東区）からは、東武スカイツリーライン・伊勢崎線に乗り、東武館林駅（群馬県館林市）で東武佐野線の葛生駅行きに乗り換える。

第六章 昭憲皇太后基金

基金創設の経緯

主要参考文献

139

135

【凡例】

- ・ 敬称は省略し、年齢は当時の数え年を使用した。
- ・ 人名・地名等に旧字体が使用されている場合は、最初に旧字体を、以下原則として常用漢字を使用した。
- ・ 地名・建物名・交通等は、執筆当時のものを使用した。
- ・ 写真等は、筆者が撮影または所蔵しているほか、許可を得て使用した。

田沼駅から南東に約三キロ、車で一〇分程行くと、国指定史跡「唐澤山城跡」に着く。案内板から一〇〇一五分歩くと、本丸跡に藤原秀郷をまつる「唐澤山神社」（佐野市富士町一四〇九）が建っている。

天慶三年（九四〇）、平将門の乱を平定した藤原秀郷は、下野守と武蔵守に任ぜられて鎮守府將軍（地方長官）となり、現在の佐野市を中心とした北関東を治めた。藤原秀郷から一三代基綱は、この地一帯が「佐野庄」と呼ばれていることから佐野姓を名乗り、佐野氏の祖になった。藤原姓佐野氏の系譜では、初代を藤原秀郷から数えている。

景綱の分家

唐沢山城主（佐野宗家）から分家した景綱には、藤原秀郷から数えて一三代基綱から、一四代國綱（国綱）から、一五代實綱（実綱）からの三様の系譜が存在する。南北朝時代（一二三六〜九二）に編纂された『尊卑分脈』では、景綱は一三代基綱の子になっている。

文政二年（一八一九）に発行された『群書類従（群書類従）』を底本とする『續（続）

群書類従』では、景綱は一四代國綱の子になっている。

明治一六年（一八八三）に藤原秀郷の系譜をまとめた『田原族譜』では、景綱は一五代実綱の子になっている。

本書では、佐野常民の直系である佐野常光氏所蔵『藤原姓佐野氏系圖（系図）』に基づいて、景綱は一四代國綱の子で、一五代を景綱としている。

景綱が住んだ上佐野

『藤原姓佐野氏系図』によれば、「景綱（佐野小次郎）、号上佐野、上州佐野村城に住む。」とある。

景綱は、建久三年（一一九二）に源頼朝に仕え、上佐野を領したと伝えられている。景綱が治めた上佐野は現在の佐野市鉢木町を含む旧阿蘇郡葛生町一帯で、秋山川に沿って南北に広がる佐野庄の北部と伝えられる。

景綱の子孫は、下野の佐野（栃木県）から上野の佐野（群馬県）に移り住み、藤原秀郷から一七代佐野源左衛門常世の時代に再び下野の佐野に移り住んだと考えられる。

伝承「鉢木」

北條（北条）時頼は、寛元四年（一二四六）、二〇歳のときに鎌倉幕府の第五代執権となり、康元元年（一二五六）に三〇歳で執権を退いて出家し、最明寺入道と称して諸国を巡行したと伝えられる。最明寺入道（時頼）の廻国について有名な話に謡曲「鉢木」がある。

最明寺入道は、旅の僧に身を変えて諸国を巡行して信濃国（長野県）までたどり着いたが、雪が深くなってきたので鎌倉に戻ろうと「佐野のわたり」（群馬県高崎市）に着いて一軒の家を訪ねて宿を求めた。

宿の主は粟の飯と、夜がふけるにつれて寒くなってきたので、秘蔵していた「梅、松、桜」の鉢の木を焚いて暖をとらせてもてなした。

旅の僧（最明寺入道）は、主に名を尋ねると佐野源左衛門常世げんざえもんつねよといい、「鎌倉に一大事があれば大急ぎで参上する覚悟である。」と武士の忠臣を示した。

やがて、風の便りに「関八州（関東八か国）の軍勢に参集が命ぜられた。」と「いざ、鎌倉」が聞こえてくると、佐野源左衛門常世は急いで鎌倉に飛んで行った。

最明寺入道こと北条時頼は、鎌倉に戻っていて、「この中に、やせ馬に乗った武者が

居るはずである。召しませ。」と命じると、佐野源左衛門常世は、おそろおそろ御前に出てかしくまった。

北条時頼は、「いつぞやの大雪に宿借りし修験者よ。」と礼を述べ、佐野源左衛門常世に本領の安堵を約束して、鉢の木にちなんで「加賀の梅田、上野の松枝（現在の松井田）、越中の桜井の三が庄を与える。」と恩賞を賜ったと伝えられる。

佐野源左衛門常世の邸跡「常世神社」

『高崎市史』下巻には、「常春（別名清常、佐野源左衛門常世の父）、始めて上野上佐野城主となり、佐野小太郎源左衛門尉げんざえもんのかみと号し、六万三千貫、上下佐野を領す。」とあり、「世々（代々）佐野に居ると記するも（中略）、一の証跡なく屋敷趾と称する所あるのみ。」と付記されている。

J R高崎駅（高崎線・上越線）（群馬県高崎市）を降りて、上信電鉄下仁田方面行きに乗り換え、二つ目の「佐野のわたり駅」で下車して踏切を渡り、南へ坂道を上ったところを左に曲がると、駅から五分程で無人の小さな「常世神社」（群馬県高崎市上佐野町）に着く。最明寺入道が一夜を過ごした佐野源左衛門常世の邸跡と伝えられ、



佐野源左衛門常世の墓

願成寺は、宝亀年間（七七〇～七八〇）に開山して天慶年間（九三八～四七）に現在地に移り、藤原秀郷の開基と伝えられ、永徳年間（二三八一～八四）に天台宗から臨濟宗に改めて鎌倉にある建長寺の末寺になった。

佐野源左衛門常世は、建長年間（一二四九～五六）あんぎやに行脚から戻り、衰退した寺を再興して祖先の霊をまつたと伝えられる。

願成寺の境内を右に一〇メートル程行き石段を上った薬師堂（釈迦堂）の左側に、「佐野源左衛門尉常世の墓」の墓標と、高さ四尺五寸（二・四メートル）の墓（宝篋印塔ほうきやくいんとう＝鎌倉時代の供養塔）があり、佐野市指定文化財になっている。願成寺本堂の正面には、

佐野源左衛門常世の墓

東武佐野線の終点葛生駅から北に一キロ、嘉多山公園かたやまの入口、万町よろずちようの交差点を左折して、さらに一キロ程進むと、右側に「臨濟宗建長寺派、梅秀山願成禅寺（願成寺）」（栃木県佐野市鉢木町）がある。葛生駅からは、徒歩で二五分程である。

願成寺は、宝亀年間（七七〇～七八〇）に開山して天慶年間（九三八～四七）に現在地に移り、藤原秀郷の開基と伝えられ、永徳年間（二三八一～八四）に天台宗から臨



常世神社

境内には「佐野源左衛門常世遺蹟いせき」という石碑が建っている。

J R高崎駅から一五分程の高崎市役所の近くには、高崎城址（高崎市高松町）がある。平安時代末期に豪族和田義信が「和田城」を築き、徳川家康が関東入りをすると、慶長

三年（一五九八）に家康の命で井伊直政がこの地に入り「和田」から「高崎」に改名されて「高崎城」が築城された。この付近に上佐野城があったという記録が見当たらないことから伝承とされる。

佐野源左衛門常世と伝えられる位牌が安置されている。

願成寺からさらに北に一キロ程、秋山・仙波方面に行くと「えびすや」
(豊代町正雲寺) とよしろちやうしょううんじ があり、二〇メートル程先の細い道を左折すると、地域の集会場になっ
ている小さな無人の正雲寺公民館がある。広場には説明板が立っていて、土塁に囲ま
れた畑一帯が「正雲寺城跡」しょううんじじょうせき「豊代城跡」とよしろちやうせき「佐野源左衛門常世館跡」やかとあとと伝えられている。

桜井にある佐野源左衛門尉常世の遺跡

佐野源左衛門常世は、北条時頼から恩賞のひとつとして越中の桜井を賜ったと伝え
られている。



佐野源左衛門尉常世遺跡

J R 富山駅 (富山県富山市) の駅前
にある電鉄富山駅から富山地鉄本線
宇奈月温泉行きに乗ると、一時間二〇
分程で電鉄黒部駅の次にある東三日市
駅に着く。

北陸新幹線黒部宇奈月温泉駅で乗り

換えて、富山地鉄本線新黒部駅から東三日市駅まで一五分で着く。東三日市駅のすぐ
北側に黒部市民会館があり、市民会館の正面に向かって右側奥に「佐野源左衛門尉常
世之遺跡」という大きな石碑が建っている。石碑の題字は、日本赤十字社初代社長佐
野常民の子息佐野常羽 つねは による。

市民会館の裏側には、「天神社遺跡」の碑があり、かつて、ここには天神社が建って
いて石碑は天神社の境内にあったと伝えられる。

唐沢山城の廃城

代々栄えていた唐沢山城は、慶長七年 (一六〇二) に廃城になった。

一説には、慶長七年に唐沢山城から江戸の方角に火が見えたので、藤原秀郷から
三〇代唐沢山城主佐野信吉 (佐野藩主、三万九千石) は、早馬で江戸城に火事見舞い
に参上した。徳川家康は「在国大名の身分で、上意 (主君の命令) じょうい がないのに参府す
るとは不届きである。」「佐野城 (唐沢山城) は高山なり。平地に築き候へ。」と命が下
り、江戸二四里以内山城禁止令により廃城になったと伝えられる。

J R 佐野駅 (栃木県佐野市) の北側に春日岡といわれる城山公園 (佐野市指定文化



福井城 山里口御門

二代藩主忠直は、大坂（大阪）夏の陣の戦功に
対する恩賞に不満を抱いて参勤交代を怠った等
より、元和九年（一六二三）に將軍秀忠により所
領を没収されて豊後国萩原（大分県大分市）に
配流（追放）となり、嫡男光長は越後国高田藩
（二五万石、新潟県上越市）に転封（国替え）、北

となり、松平姓を名乗って越前松平の祖になった。
JR北陸本線福井駅西口から徒歩五分のところに「北の庄城址・柴田公園」（福井
市中心）がある。北庄城は、柴田勝家が築城したもので、秀康は現在の福井県庁の
地（福井市大手）に新たに城を築き、のちに福井城に改められた。県庁の西側には
山里口御門が復元されて、福井県は坤櫓の復元についても企画を進めている。

藤原秀郷から二八代佐野常貞（安房守、佐野常
民から九代前）は、結城秀康に仕えて越前に移住
し、俸禄として一千五〇〇石を賜った。唐沢山城
が廃城になる一年前のことである。

財史跡および名勝）がある。佐野信吉は、慶長七年十二月に唐沢山を下りて春日岡に
城を築き、ここにあった惣宗寺（春日岡山転法輪院惣宗官寺）は移転して後に天台宗
になり、関東の三大師「佐野厄よけ大師」として知られている。
信吉は、慶長一八年（一六一三）に所領を没収されて、翌年七月に信州松本藩主小
笠原秀政にお預け処分となり、藤原姓佐野藩が滅亡して足利姓佐野藩になった。
信吉は、寛永一一年（一六三四）七月に將軍徳川家光によって赦免され、二人の子
息は旗本として佐野家を再興した。

初代福井藩主松平秀康に仕える

徳川家康の次男秀康は、天正一八年（一五九〇）に下総国結城晴朝の養子になり、
家督を継いで結城城主になった。JR水戸線結城駅（茨城県結城市）から北東一・六キ
ロのところに「城跡歴史公園（結城城跡）」がある。

結城秀康は、慶長五年（一六〇〇）の「関が原の戦い」で東軍（徳川方）に味方し
て勝利した功績により、慶長六年（一六〇一）に結城一〇万一千石から越前国北庄
（福井県福井市）六八万石を拝領して国替えになり、北庄藩（福井藩）初代藩主（藩祖）

庄は光長の弟忠昌が継いだ。

藤原秀郷から三〇代佐野常俊（常民から七代前）は、この時、牢人（浪人）になった。浪人とは、主君を失った武士の意味で、その後再び仕えず京（京都）に移住した。

京都から佐賀へ

常俊の子で藤原秀郷から三一代常眞（常真）は、京で医術を修めて壽仙（じゅせん）と号し、第二代佐嘉（佐賀）藩主鍋島光茂に召し抱えられ、俸禄として切米（きりまい）（知行地を持たないで藩から玄米が支給される）五〇石を賜り、京から佐賀へ下った。

佐野家は、三一代常眞から三六代常民の父常徴（つねみ、号・孺仙（じゆせん）、俸禄切米七〇石）まで六代にわたって佐賀藩の藩医を務めた。

J R 佐賀駅から東南一キロのところにある日蓮宗安性山國相寺（こくそうじ）には、佐野家六代の墓がある。境内には、樹齢七〇〇年といわれる大きな楠の木が繁っており、明治のある日、国相寺の住職が楠の木を売って寺の資金にしようとしたとき、佐野常民が寺に多額の寄附をしたので楠の木が切られずに残ったと伝えられている。

常民の誕生

佐賀駅バスセンターから早津江行きのバスに乗ると、三〇分程で終点の「早津江」に着く。そこから五分程歩くと「伯爵佐野常民君生誕地」の記念碑が建っている。大正一五年（一九二六）に日本赤十字社創立五〇周年の記念事業として建立された。

記念碑からほど近い筑後川のほとりには「佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館」が建っており、終点の前に「佐野・三重津歴史館入口」のバス停がある。

平成二七年（二〇一五）に筑後川沿いに残る三重津海軍所跡（幕末佐賀藩の洋式海軍の拠点）が「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として八県におよぶ産業が一つの群として世界遺産に登録されたことから、令和三年（二〇二二）に「佐野常民記念館」から「佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館」としてリニューアル・オープンした。

佐野常民は、文政五年（一八二二）二月二八日（新暦の文政六年二月八日）



佐野常民生誕地

に、佐賀藩早津江津（佐賀市川副町早津江津）にある藩士下村充賛（通称・三郎左衛門）の五男として生まれ、鱗三郎と名づけられた。

早津江は、九州一の筑後川が有明海に注ぐところにあつて、早津江津の津は港を意味し、五か津の一つとして栄えていた。筑後川には大きな島が中州になっており、対岸は柳川藩（福岡県柳川市）で早津江は佐賀藩の要衝でもあった。

佐野常民の生誕は、フローレンス・ナイチンゲールが生まれた一八二〇年五月二〇日から二年後、赤十字の創始者アンリー・デュナンが一八二八年五月八日に生まれる六年前のことで、ナイチンゲールやアンリー・デュナンと同じ時代に生きた人である。

佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館

実父下村充賛は、土地の名士から選ばれた早津江代官（在住代官）を務め、後に、佐賀藩の財政を担当する銀方（会計方）となり、大阪で佐賀藩の借銀（借金）の整理に当たするなど活躍して藩の財政立て直しに尽力した。



佐野家の養子

鱗三郎（後の佐野常民）は、天保三年（一八三二）、一一歳の春に佐賀城東側の片田江七小路の一つ、枳小路（佐賀市水ヶ江二丁目）にある親戚の藩医（外科医）佐野常徴（号・孺仙）の養子となり、前藩主（第九代）鍋島齊直（齊直）から榮壽（榮寿）と名を賜った。

片田江七小路一帯には、中流階級の

武士が居住しており、一つ南側の会所小路に大隈重信の生家がある。佐野家の側には、佐賀病院好生館（佐賀市水ヶ江二丁目）があつて、佐野常民は西南戦争当時、ここから救護員を採用した。

佐賀県立病院好生館は、平成二五年（二〇一三）に、地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館として佐賀市嘉瀬町中原四〇〇番地に新築移転した。



佐野常民家系図（作成：佐藤雅紀）

結婚

佐野常民の父常徴から二代前の佐野常置（号・仲庵^{ちゅうあん}）の三男利昌は、山領言利（通称・千左衛門）の養子になり、主馬利昌と名乗って「肥前兵法タイ捨流剣術^{しや}」に熟達していた。利昌の子眞武（真武）（通称・圓左衛門）は、佐賀藩主（第一〇代）鍋島直正（号・閑叟^{かんそう}）の剣術指南を務めた。

その娘の駒子は、佐野家から山領家の養子になった利昌の孫に当たり、六歳の時に佐野常民より先に佐野家の養女になっていた。常民と駒子は、天保十三年（一八四二）の冬に結婚した。ともに二一歳であった。

藩校弘道館に学び、上京

佐嘉神社（佐賀市）の西隣りに藩校弘道館があった。現在は、公益財団法人鍋島報效会徴古館（佐賀市松原二一五―一二）になっており、敷地内に「弘道館記念碑」が建っている。

当時、栄寿という名であった佐野常民は、藩校弘道館に学び、後に親戚の松尾家塾で外科術を、また、弘道館の内生として医術を学んだ。

天保八年（一八三七）に一六歳で江戸に遊学して、翌九年（一八三八）に湯島にある江戸幕府直轄の昌平坂学問所の教授を務めた儒学者古賀侗庵^{こがとうあん}に学んだ。

J R 中央線・総武線お茶の水駅の聖橋口^{ひじりばしぐち}から聖橋を渡った東京科学大学病院（旧東京医科歯科大学病院）の角に「近代教育発祥の地（昌平坂学問所があったところ）」の説明板が立っており、そこから階段を降りて左へ行くと四〇五分で史跡「湯島聖堂」（文京区湯島一―四―二五）に着き、奥に大成殿（孔子廟^{びよう}、土日祝日のみ公開）がある。

昌平坂学問所は、湯島聖堂とともに江戸時代の学問の中心地であった。

天保一〇年（一八三九）、前佐賀藩主鍋島齊直が江戸邸で逝去したので、父の常徴は侍医として霊柩（ご遺体）とともに佐賀に帰国し、佐野も母とともに帰国した。



弘道館記念碑

医学への道

佐野は、弘化三年（二八四六）、二五歳のときに廣瀬（広瀬）^{げんきよう}元恭の「京都時習堂」^{じしゅうどう}（京都市金座通三条北にあつた）に入門した。

二年後の嘉永元年（一八四八）、二七歳で緒方洪庵の「適塾」^{てきじゅく}に入門した。

大阪の地下鉄御堂筋線淀屋橋駅^{みどうすじ よとやばし}から四〇五分のところに「適塾」^{てきじゅく}（大阪市中央区北浜三丁目三番八号）があり、脇に「史跡緒方洪庵舊宅（旧宅）及塾」の碑が建っている。

適塾の塾生名簿である『適々齋塾姓名録』^{てきじゅくせいめいらく}には、一三二番目に「嘉永戊申^{ぼしん}元年中秋、肥前佐嘉藩、佐野榮壽」とある。一三三番目には、同年に佐賀藩から入門した宮田魯齋^{ろさい}（魯齋）がいる。

佐野は、嘉永二年（一八四九）三月七日に紀伊国西野山の華岡青洲^{はなおか せいしゅう}（青洲）の「春林軒」^{しゅんりんけん}（和歌山県紀の川市西野山四七三）に入門した。

J R和歌山駅（和歌山市）から和歌山線に乗ると、三五分で名手駅^{なて}（和歌山県紀の川市）に着く。名手駅



適塾

から車で五分（徒歩で二〇分程）のところに春林軒がある。「華岡青洲先生春林軒門人録」には「肥前、佐賀藩中、佐野榮壽（榮寿）」とある。青洲はすでに亡くなっており、わずか一年間ではあつたが近代的な医学を学ぶ機会に恵まれた。

同年、藩主の命により江戸の下谷御徒町^{したやおかちまち}にあつた伊東玄朴の「象先堂」^{しょうせんどう}（東京都台東区台東一丁目三〇番付近）に学んだ。

「象先堂跡」^{しょうせんどうあと}は、J R山手線秋葉原駅^{あきはばら}の昭和通り口を出て信号を渡り、左へ十分程歩くと、昭和通りと蔵前通りの交差点があり、すぐ右の歩道脇に「伊東玄朴居宅跡・種痘所跡」^{しゅとうじょ}の説明板がある。

種痘所跡とは、安政五年（一八五八）五月七日に開設された「お玉ヶ池種痘所」^{たまが池しゅとうじょ}（東京大学医学部の前身）が一月一五日に火災で焼失して万延元年（二八六〇）に伊東玄朴宅^{げんぼく}の南側に再建されたもので、その後、「西洋医学所」「東京医学校」に改称し、明治一〇年（一八七七）に東京医学校と東京開成学校が合併して



春林軒

東京大学になった。佐野は、長崎に転遊を命ぜられる前年の嘉永三年（一八五〇）に熱病で重症になったが、伊東玄朴らが治療して全快することができた。

技術者を連れて佐賀に帰る

佐野常民は、嘉永四年（一八五二）に長崎に転遊を命ぜられると、広瀬元恭の「京都時習堂」で知り合った、化学者で京都の中村奇輔、蘭学者で但馬の石黒寛次、からくり儀右衛門ぎえもんといわれた久留米の田中久重と子息彌三郎（弥三郎、二代目儀右衛門）の四人を佐賀に連れて帰り、四人は藩籍に列せられて、のちに常民と働くことになる。

田中久重は、優秀な職人の称号といわれる近江大掾おうみだいじょうを与えられて、田中近江大掾久重と名乗った。田中久重は、嘉永三年（一八五〇）に和時計と洋時計を連動した機械式の萬年（万年）自鳴鐘じめいしょう（時計）を製造し、のちに藤岡市助とともに東芝を創業した。万年自鳴鐘は、上野の国立科学博物館に保存されている。

医者になる

嘉永四年（一八五二）十二月一日、佐野常民は、父孺仙とともに佐賀病院好生館の「医

業免札姓名簿」に佐野榮壽の名で登載されている。

佐賀藩では全国でもめずらしく医業免札（開業免許）制度を採用していた。父の佐野孺仙は、佐賀藩の藩医を務めており、栄寿も藩主の命により医術を学んでいたことから、医者としての開業が認められた。

ちなみに、明治になると、医師の国家試験が実施されて、現に開業している者は試験が免除されたが、常民は開業していないので明治期は医者ではない。

精煉方主任

佐賀市内を流れる多布施川たふせがわを利用して、築地反射炉ついでじと多布施反射炉（鉄などの金属を溶かす溶解炉）があった。

日新小学校（佐賀市長瀬町）の校庭右側には、大正時代に復原された築地反射炉の模型が建っている。また、多布施川のほとりには多布施反射炉跡のほかに精煉方せいれんかた（いまだという理化学研究所）の記念碑がある。

築地反射炉は、嘉永三年（一八五〇）に長崎防備の大砲を製造するために設けられた。佐賀藩で鑄造された大砲は、江戸にも運ばれて品川台場（東京都港区台場）に配置された。

嘉永五年（一八五二）十一月には精煉方が設けられて、長崎で蘭学を教えていた常民は、翌六年（一八五三）三二歳のときに、藩主鍋島直正から帰郷と髪を蓄えるように命ぜられて名を榮壽左衛門（えいじゅざえもん）と賜り、精煉方主任に任ぜられた。当時の医者は僧侶と同様に頭をまるめていたので、精煉方に専念するということであった。

精煉方では、常民を中心として、安政二年（一八五五）に我が国で最初の蒸気船雛形（模型）を二艘（外輪船、内輪船）と蒸気車（蒸気汽車）の雛形（模型）が完成した。蒸気船は池に浮かべ、蒸気車は盤上で本物さながらに巧妙に走った。

蒸気船と蒸気車の雛形は、公益財団法人鍋島報効会徴古館に展示されており、蒸気車雛形の複製は「佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館」に展示されている。



築地反照炉（模型）

海軍伝習と三重津海軍所

安政二年（一八五五）、江戸幕府は、オランダから海軍創設の建言により汽帆船スームビング号（日本名・観光丸）の提供を受けて長崎で海軍の訓練を開始した。長崎海軍伝習所には、佐賀藩から佐野常民ら四八人が参加している。伝習生は、幕府、福岡藩、薩摩藩、佐賀藩など一二〇人以上が参加して西洋の新知識を吸収した。

佐賀藩では、安政五年（一八五八）に三重津御船手稽古所おふなてけいこしょを設けて海軍の訓練を開始して佐賀藩海軍の基礎を築いた。

灯台の建設

慶応二年（一八六六）五月、幕府は、アメリカ、イギリス、フランス、オランダに灯台の設置を約束した。イギリス公使パークスは、八か所に灯台の設置を要求して、灯台建設は明治政府に引き継がれた。

フランス人技師フランソア・レオンス・ヴェルニー（ベルニー）は、横須賀製鉄所の建設に来日したが、灯台の建設にかかわり、神奈川県三浦半島の観音埼灯台、千葉県房総半島の野島埼灯台、東京都港区の品川灯台、神奈川県三浦半島の城ヶ島灯台を



佐賀藩使節（野中烏犀圖所蔵）

左から：後列 藤山文一、深川長右衛門
前列 小出千之助、佐野常民、野中元右衛門

奥詰医師高松凌雲ら二九人、一行三〇人である。一行は、慶応三年（一八六七）正月一日（新暦二月十五日）にフランス郵船アルフィー号で横浜を出航し、二月二十九日マルセイユに入港して、三月七日（新暦四月一日）にパリに到着した。

佐賀藩からは、佐野常民（当時、栄寿左衛門）を事務管長（代表者）として、漢方で有名な烏犀圓の野中元右衛門（古水）、貿易商の深川長右衛門、通弁（通訳）として万延

建設した。灯台の建設は、イギリス人技師リチャード・ヘンリー・ブラントンに引き継がれた。

佐野常民は、明治四年（一八七一）に明治政府の工部大丞兼燈臺（灯台）頭を務めた。愛知県犬山市にある博物館明治村には、明治三年（一八七〇）三月に建設された現存する最古の品川灯台が保存されている。品川灯台は、昭和三十九年（一九六四）に明治村に移築再建され、昭和四三年（一九六八）に国の重要文化財に指定された。

万国博覧会

パリ万国博覧会

パリ万国博覧会は、一八六七年（慶応三）四月一日から十一月三日まで、パリのシャン・ド・マルスで開催され、我が国からは幕府と薩摩藩と佐賀藩が参加した。

幕府は、徳川慶喜が第一五代将軍を継いだばかりだったので、一五歳の弟徳川昭武を将軍名代として派遣した。随行は、勘定方澁澤篤太夫（のちの澁澤榮一＝渋沢栄一）、

元年（一八六〇）に幕府の遣米使節団に参加した小出千之助、精煉方の藤山文一の五人が参加した。

佐賀藩の一行は、慶応三年（一八六七）三月八日（新暦四月一二日）に長崎からイギリス郵船フィロン号に乗って出航し、三月一四日に香港に到着した。長崎を出航したときには、パリ万博はすでに始まっていた。

フィロン号には、アメリカに留学する岡山藩士花房義質よしもとらが同乗した。花房は、のちに日本赤十字社第三代社長に就任している。

佐賀藩一行は、徳川一行をスエズに送って香港まで引き返したフランス郵船アルフィー号で香港から出航した。スエズからは蒸気汽車や地中海蒸気船に乘換えて、五月五日にフランスのマルセイユに到着した。

佐野は、一行に先立って七日にパリに向かい、徳川昭武一行に挨拶をした。残る一行四人は、



赤十字展示館（Guidebook to the Great Exhibition in Paris, 1868、日本赤十字社所蔵）

五月一二日（新暦六月一四日）にパリに到着して佐野と合流した。この日、野中古水はパリで急死した。野中は病弱であつたが、佐野からパリ万博への随行を誘われると、フランスは仏国、つまり、仏の国であるから途中で亡くなつても本望であると喜んで参加した。野中古水は、長崎で乗船したときからマルセイユに到着するまでを『佛國（仏国）行路記』として記録している。万国博覧会では、佐賀藩は有田焼等を展示販売した。

パリ万国博覧会会場には、赤十字展示館があつた。

佐野は、万博に参加するほか、佐賀藩の軍艦「日進丸」をオランダに発注する任務を担っていた。

ウィーン万国博覧会

明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会は、日本が明治政府として初めて公式に参加した万博である。

万博は、五月一日から一〇月三十一日まで（実際は一一月二日まで）、ウィーンのプラール公園（プラーター公園）で開催された。二〇二三年（令和五）は、万博一五〇周年を記念して、ウィーン万博で使用されたのと同様の直系一〇〇メートルを超える

「ロトゥンデ」（大きな円形建造物）が建設された。

佐野常民は、明治政府から博覧会副総裁兼イタリア、オーストリアの弁理公使（特命全權大使に次ぐ公使で、現在はこの制度はない）として派遣され、技術伝習者を含む総勢七十七名が参加して、日本の工芸品や技術を紹介したほか、外国の技術を積極的に調査して帰国した。万博の会場入口には、名古屋城の金の鯨しやちほこが展示されていた。

平山成信しげのぶ（当時、成一郎）は、二〇歳で三級事務官（博覧会職位）としてフランス語通弁（通訳）を担当し、アレクサンダー・フォン・シーボルトは四月中旬に佐野から三級書記官心得（博覧会職位）に任命されて通弁（通訳）を担当した。弟のハインリッヒ（ヘンリー）・シーボルトも一行に含まれている。

佐野は、ウィーン万国博覧会で赤十字社が大いに発展して、ジュネーヴ条約加盟国も二二か国になっていることを知った。

万博が終わると、佐野は明治七年（一八七四）一月に、フランス語を得意とす



ウィーンの佐野常民
（筆者所蔵）

る平山を同行してイタリアのローマに公使として赴任した。

平山はローマで熱病にかかり、佐野は平山のベッドを佐野の室内に移して看病しドイツ人医師に診察させた。今度は、佐野が重い肝臓病になり、平山が随行して飲む温泉地として有名なカールスバート（現在、チェコのカルロヴィ・ヴァリ）で療養した。その後、オーストリアのスイスといわれる二千メートル級の山々と美しい湖水地方の温泉地、ザルツブルクの南東にあるバート・イシュルで療養した。

佐野は、明治七年一二月に帰国すると、翌年の初めから博覧会の整理と報告書の編纂を分担して着手し、膨大な報告書を完成させた。

大給恒

大給松平の祖

博愛社（のちの日本赤十字社）のもう一人の創立者大給恒おぎゆう（恒ゆずる）の家系は、徳川家康と同じ松平親氏ちかうじを始祖とする。

名古屋鉄道三河線・豊田線豊田市駅東口（愛知環状鉄道新豊田駅から豊田市駅までは高架歩道で連結している）から一時間に一便程度の「とよたおいでんバス」下山・豊田線大沼行きに乗ると、三〇分程で松平郷（豊田市松平町）に着く。

バス停から徒歩で一〇分程北上すると「松平東照宮」があり、松平氏の館跡（松平氏の発祥地）と伝えられる。近くには、松平城址（郷敷城址）や松平氏の菩提寺高月院、

松平親氏の銅像がある。

松平氏の始祖親氏は、諸国を遍歴して仏道を説く時宗僧で、松平郷で太郎左衛門信重に望まれて末娘・水の婿となり、還俗して家督を継ぎ親氏と名乗った。

親氏から松平宗家八代廣忠（広忠）の子は徳川家康として徳川姓を名乗り初代徳川宗家になった。

親氏から四代親忠は、次男乗元（乗元）に大給城を与え、乗元は大給城に居住して初代大給松平宗家になった。

大給城址は、松平郷の近くにあり、以前はバス停大



松平東照宮

給から高い石垣が見られ、頂上は、春は桜、秋は紅葉で知られていたが、現在はバス停大内から「大給城跡公園」の表示に従って山道を二〇分程歩く。

西尾藩の分家

大給松平宗家は、初代松平乗元から西尾藩六万石（愛知県西尾市）一六代藩主松平乗承（乗承）に続く。名鉄西尾線西尾駅西口から徒歩一五分のところに西尾市歴史公園（西尾市錦城町二三一一）があり、園内に平成八年（一九九六）に復元された本丸丑寅櫓（北東の方角にある三重層の櫓）がある。

松平乗元から五代眞乗（眞乗）の長子家乗（家乗）は家督を継いで大給松平宗家の六代となり、弟眞次（眞次）は大給恒家（奥殿松平家）の初代宗家になった。

大給恒家は、西尾藩の分家に当たる。眞次は、二代將軍秀忠に仕えて大坂（大阪）夏の陣で活躍して祖先の地大給を領した。

また、大給恒の母は松平乗承の姉であるから、松平乗承と大給恒は叔父と甥との関係になる。西南戦争当時、叔父に当たる松平乗承は二七歳、甥に当たる大給恒は三九歳、大給の方が年長で松平乗承は大給恒を兄のように慕っていた。

大給恒は、明治九年（一八七六）から明治一八年（一八八五）まで、大給松平一三家の代表として宗族長の役割を務めた。

奥殿藩の誕生

真次の子二代乗次（乗次）は、奥殿村を含めて三河領四千石を拝領し、四代乗眞（乗眞）は信濃国（長野県）佐久郡田野口村を含む一万二千石を拝領して三河、信濃両国を合わせて一万六千石を領した。乗眞は、正徳元年（一七一）に初めて奥殿に入り奥殿藩が誕生した。



奥殿陣屋

名鉄名古屋本線東岡崎駅から奥殿陣屋行きのバスに乗ると、三〇分程で終点の奥殿陣屋（愛知県岡崎市奥殿町雑谷下一〇番地）に着く。

大給恒の誕生

大給恒は、天保一〇年（一八三九）一月三日（新暦二月二八日）、奥殿藩の江戸の麻布藩邸に生まれ、幼名を三郎次郎といった。嘉永五年（一八五二）三月七日、一四歳で家督相続により奥殿藩主となり、翌嘉永六年（一八五三）一月七日に松平乗謨（乗謨）と改名した。

大給恒（松平乗謨）は、小藩ながら文久三年（一八六三）に徳川幕府の若年寄、慶応元年（一八六五）に陸軍奉行、慶応二年（一八六六）に老中格に栄進している。

信濃（長野県）へ国替え

文久二年（一八六二）、従来一年置きに行なわれていた江戸と国元を往来する参勤交代が緩和されたことにより、家臣を長く国元に留めておく必要が生じた。

三河の領地は四千石で信濃佐久郡の領地は一万二千石であるから、徳川幕府に信濃への藩地移転（国替え）を願い出、翌三年に許可されて田野口藩になった。禄高は、三河を含めて一万六千石で変わりはない。

さらに、徳川幕府に築城を申し出て、慶応三年（一八六七）に通称「龍岡城」、または「龍



満開の龍岡城五稜郭

岡城五稜郭^{ごりようかく}」（正式には「龍岡陣屋^{じんや}」）が落成した。明治元年（一八六八）に領国信濃に入って田野口藩を龍岡藩に改称して龍岡藩主（二万六千石）となり、松平姓から祖先の地、大給の姓に改めた。翌二年八月に乗謨を恒に改めて大給恒になった。

大給恒は、三河の奥殿藩主であり信濃の龍岡藩主であったことから、愛知県の出身であり長野県の出身でもある。

長野県の北陸新幹線^{さくだいら}佐久平駅^{さくみ}でJR小海線^{こうみ}に乗り換えて、龍岡城駅^{たつおかじょう}、または白田駅^{うすだ}から徒歩二〇分程のところに龍岡城五稜郭（龍岡城跡）（長野県佐久市田口三〇〇〇）がある。白田駅からの方が少し近い。龍岡城五稜郭は、函館にある五稜郭の約四分の一の五角形の星形をした西洋式の城郭で、国の指定史跡になっている。

城跡には、田口小学校があつたが、令和五年（二〇二三）三月に廃校になり、令和五年四月一日に四校が統合した新しい白田小学校が誕生した。旧田口小学校の校庭には当時の龍岡城の御台所が今も残っていて、すぐ側に「五稜郭であいの館」がある。

勲章の制定

勲章に類似したメダルは、慶応三年（一八六七）、パリ万国博覧会が開催されたときに、薩摩藩が金色の星の中心に赤い丸の十の字を入れて薩摩琉球國の五文字を藍色で配し、紫の綬をつけて、裏に「贈文官兼武官」と刻



松平家系図（作成：佐藤雅紀）

んで各国の要人らに贈った。

大給恒は、明治政府に勲章制度を提案して、明治政府は明治四年（一八七二）に当時の立法機関である「左院」で賞牌（のちの勲章）の検討を審議することにした。大給は、明治六年（一八七三）に賞牌取調御用掛に任命された。

大給は、銀に七宝を飾りつけるには、刀剣の飾り匠平田春行を起用し、章身は銀地金を彫って形を整え、綬は水紋発明者の杉村春吉を起用している。

勲章の原図は、大給恒によるもので、明治八年（一八七五）に「勲等賞牌令」および太政官布告により我が国最初の勲等賞牌（明治九年に勲章と改称）が制定された。

大給は、明治九年（一八七六）に賞牌取調掛、兼ねて賞勲事務局副長官に任命され、明治十一年（一八七八）に賞勲局副総裁、明治二十八年（一八九五）に賞勲局総裁になった。

第二章 西南戦争と博愛社の救護活動

西南戦争

西南戦争始まる

日本人同士による最後の戦いである西南戦争は、明治一〇年（一八七七）二月一日に始まり（前衛隊は二月一四日に鹿児島を出発）、九月二十四日に終わった。

鹿児島地方は六〇年ぶりともいわれる大雪で、雪は二月一二日に降り始め、二月一五日には六〇七寸（およそ二〇センチ）の積雪があった。

薩軍は、二月一五日から一七日までの三日間、午前六時に集結して午前八時に出発した。一大隊は東へ進路をとって加治木を経由し、一大隊は西へ進路をとって出水（いずみ）を経由して、政府軍の拠点になっている熊本城へ向かった。

西郷隆盛、桐野利秋らは、一七日に大砲隊とともに東へ進路をとり、途中、旧藩主島津邸の門前で一礼をして通過し、初日は加治木で宿をとり、北上して山間を進んだ。雪は一九日まで降り続く。一四日に出発した前衛隊一千六〇〇人は、二〇日に熊本の

川尻町に到着し、翌二一日には薩軍のほとんどが川尻町に集結して薩軍の本営と病院が置かれた。

薩軍、熊本城を総攻撃

二月二二日、薩軍は、熊本城から西へ一キロ程、城をのぞむ高台の段山だにやまから熊本城に大砲を撃込んで本格的な戦いが開始された。攻撃に参加した薩軍は、およそ七千人。一方、政府軍の熊本鎮台司令長官谷干城たてきは、福岡方面から政府軍の応援隊が来るまで籠城を決めた。籠城は、三千五〇〇人で直接の戦闘員はおよそ二千人といわれている。段山は熊本市電段山駅付近で、現在は平地になっている。

植木の初戦と田原坂の合戦

薩軍は、熊本城の包囲を続けるとともに、主力は福岡方面から来る政府軍を阻止するために北進し、二月二二日に植木で南下してきた政府軍と遭遇して戦闘になった。

二月二三日、薩軍は木葉このはを占領したが、薩軍本営から「退いて植木を守れ」と指令を受けて木葉から田原坂たばるさか、植木へと退却した。『西南記傳』には、本営は退却を命じて



弾痕の家

いかなかったとあり、誤って退却の指令が伝えられたと考えられる。

一方、政府軍も、二月二五日～二七日の高瀬の戦いの際に乃木希典のぎまれすけが田原坂まで薩軍を追っていたが、政府軍から退却の指令を受けて高瀬まで退却している。乃木は、二七日の戦いで足に重傷を負い、薩軍の西郷隆盛の弟西郷小兵衛は戦死した。

田原坂は、高瀬方面から熊本城へ大砲を運ぶ際に通過しなければならない重要な場所であったが、薩軍も政府軍もそのことには気がついていなかった。

田原坂の合戦は、三月四日に始まり三月二〇日に終わる西南戦争最大の戦いである。田原坂の頂上には「弾痕の家」がある。「弾痕の家」は、平成二七年（二〇一五）に熊本市田原坂西南戦争資料館の別館としてリニューアル・オープンした。

「雨は降る降る人馬はぬれる 越すに越されぬ田原坂」と歌われているように、三月四日～二〇日までの一七間に雨の日が六日間、三日に一日の割合で

降っている。

薩軍は、田原坂の頂上を占拠して上から攻撃し、政府軍は坂の下にいて、わずかに二五〇メートルの至近距離から薩軍に向けて大砲を撃っている。

三月一五日の明け方は濃霧で、薩軍の抜刀隊は午前四時に政府軍を急襲した。政府軍は、毎日、午前五時に集合して午前六時に出撃することになっていたから、この急襲は予想もしていなかった。政府軍もまた、抜刀隊を編成して薩軍に斬り込んでいた。田原坂の合戦では、刀傷の負傷者が多かった。

三月二〇日午前中は、濃霧と大雨で、政府軍はいつものとおり午前六時に三発の号砲を合図に総攻撃をかけた。政府軍は、正面からばかりでなく、側面からも奇襲をかけて、午前一〇時頃にわずかに四時間で田原坂を占領して、薩軍は田原坂から退却した。

薩軍の敗因のきっかけ

西南戦争の勝敗を左右したのは、政府軍が、三月一四日に別働旅団を編成して軍艦で高島鞆之助（ともすけ）、黒田清隆（きよたか）らが長崎から八代（やつしろ）（熊本県八代市）に上陸したことで、八代の占領は薩軍にとって思いがけない事件であった。

薩軍は、鹿児島からの食料や弾薬等の補給が断たれたばかりでなく、政府軍に北と南から挟みうちの状態になったので、四月一五日、全軍に総退却を指令して、本営を川尻町から三里（一二キロ）程離れた木山（きやま）（熊本県上益城郡益城町木山）に移して、退却を続けながら各地で政府軍と戦った。

八代に上陸した黒田清隆は、四月一五日に熊本城に到着して、籠城以来五四日ぶりに政府軍と熊本城との連結に成功した。

最後の決戦地

薩軍と政府軍の最後の決戦は、八月一五日に和田越え峠（きよたか）（宮崎県延岡市）で薩軍三千五〇〇人、陸軍卿（きやう）（大臣に相当）山縣（山県）（ありとも）有朋が指揮する政府軍五万人で五時間におよぶ激戦が行なわれ、政府軍の勝利に終わった。

J R 日豊本線延岡駅（のべおか）（宮崎県延岡市）から車で一五分程、主要道路から離れて林道を走ると、峠に「明治一〇年西南戦争和田越決戦之地」の記念碑がある。

西郷らは八月一六日に延岡の北にある俵野地区の旧児玉熊四郎邸に宿陣して軍議を

開き、薩軍の解軍を決めた。現在、西郷隆盛宿陣趾史料館（延岡市北川町長井）になっている。

西郷隆盛ら六〇〇人ばかりは、村人を道案内にして一七日夜に可愛岳^{えのたけ}を經由し、一八日の未明に政府軍の包囲網を突破して鹿児島へ向かった。鹿児島に帰った西郷らは、最後の五日間を西郷洞窟で過ごした。西郷の号を冠した南洲公園から五〇〇メートルの付近に「南洲翁（西郷隆盛）終焉之地^{しゅうえんの}」の記念碑がある。

政府軍と薩軍の戦闘能力

西南戦争は、政府軍は六万人、薩軍は三万人、合計九万人が戦い、両軍合せて三万人を超える死傷者があった。

薩軍は、クリミア戦争でも使用されたという旧型の前装式エンフィールド銃が主力で銃口から火薬と銃弾を押し込んで使用した。鹿児島を出発した際に持参した銃弾は一五〇万発と伝えられる。単純に計算すると、薩軍三万人の半分一万五千人に一人当たり百発が支給されたことになる。

政府軍は、後装式スナイドル銃が主力で、火薬と銃弾が一体になっているので銃口から弾をこめる必要がない。弾は、一人当たり一日に一〇〇発が支給されている。

政府軍は、陸軍ばかりでなく海軍も活用して五月には海軍が鹿児島に上陸している。

博愛社の創立

博愛社設立の動機

三月一八日、田原坂の合戦の最中に、華族（旧公卿や諸侯）の督部長（総括者）の立場にある岩倉具視^{いもみ}は、同じ華族の三條實美（三条実美）^{さねとみ}と相談をして「華族は身分相応に財を抛出し、婦女は綿撒糸^{めんさんし}（綿布の糸をほぐしてガーゼのようにした衛生材料）や繻帯（包帯）を作製して傷病者に贈るべきである。」と提案し、三条と岩倉の名によって華族全員に負傷者の救済を呼びかけた。

呼びかけ文書には、お雇い外国人（大蔵省御傭）アレクサンダー・フォン・シーボルトに依頼してまとめた「シーボルト氏貴族社会概説」が添えられた。華族は、この

呼びかけに応じて、短期間のうちに合計三万一千円、綿撒糸三七八貫（約一千四二〇キログラム）、繙帯二万三千九〇〇巻ほか多くの金品が寄せられて、四月一八日に陸軍省および海軍省に寄贈された。

後日、博愛社は、明治一三年（一八八〇）六月九日に「本社の創立は、三条と岩倉が華族に呼びかけたのを知って感動したことが動機になった。」と三条、岩倉あてに送っている。佐野常民と大給恒は、絶好の機会が訪れたと考えたに違いない。

佐野と大給の会談

佐野常民は、欧州にある篤志救護社（赤十字社）と同様の組織を設立したいと考えて、元老院議員（現在の国会議員に相当）として右大臣岩倉に相談をし、大給恒は、華族の事業として一大私立病院を設立したいと考えて、華族の督部長の立場にある岩倉に相談をした。

大給が岩倉に相談をして一〇日ばかり経った頃に岩倉から連絡があり、佐野と話し合っただろうかということであった。

佐野と大給は、明治八年（一八七五）七月二日に元老院議員（定員三〇人）に任命

されて旧知の間柄であったが、このとき二人が同様のことを考えているのを知った。

大給の談話によれば、佐野から訪問を受けたとされる。元老院では、身分の序列に基づいて席順が決まっており、大給は旧藩主で佐野よりも上だったので、佐野から大給に話しかけてきたとしても不自然ではない。

佐野と大給は、三月下旬に元老院で会談をして、佐野は救護社の設立について、大給は華族の事業について話し合い、中国の故事にある「博愛之謂仁」から「博愛社」を設立することにした。

シーボルトの助言

岩倉具視は、四月三日、アレクサンダー・フォン・シーボルトに佐野の救護社の計画について援助するように依頼し、シーボルトはその日に佐野を訪問した。佐野と大給が博愛社の設立願書を太政官（当時の政府）に提出する前のことである。

博愛社設立願書が右大臣岩倉具視あてに提出された四月六日、岩倉は改めてシーボルトに救護社設立のことについて佐野を援助するように依頼し、シーボルトは「公命を領せり」と認識している。

明治四年（一八七二）十一月から明治六年（一八七三）九月まで、岩倉具視を特命全權大使とする使節団は欧米各国を視察し、岩倉と伊藤博文はジュネーブで赤十字国際委員会のギュスターブ・モアニエと会談したことが赤十字国際委員会の紀要で紹介されている。岩倉は、赤十字の存在を知っていたことになる。

シーボルトは、四月七日に「佐野殿とともに本件を取り扱う。」、四月九日に「佐野殿邸において本件を取り扱う。」、四月一〇日に「佐野殿を訪う。」^{おこな}「奥国（オーストリア）のマリヤの社の例に倣い、^{なら}救護隊を編成することにした。」と日記に書いている。（「柴田承桂書翰」『海外事件関係書類』HAKI-018.日本赤十字社）

フランク・ケーザー氏によれば、シーボルトの日記に「四月三日から一日の間に佐野に六回会って助言を与えた。」「佐野は（シーボルトが所属しているドイツ騎士団の）マリア派をモデルにした救急隊の編成を担当している。」と記している。

(Frank, H.K. (2014). Japan und das Rote Kreuz 1867-1905. Freien Universität Berlin)

シーボルトの助言は、佐野に勇気と今後の活動に自信を与えたと考えられる。

太政官へ願書を提出

明治一〇年（一八七七）四月六日、佐野と大給は、連名で博愛社設立願書と博愛社社則を右大臣岩倉具視あてに提出した。大給は、佐野から岩倉右大臣への願書の提出を頼まれ、大給恒の叔父に当たる松平乗承が代理で太政官に提出したという。佐野は、当局者に一日の遅れも多くの人命に関するので、最も急を要すると懇願している。

佐野と大給は、博愛社設立願書とは別に、連名で「文部省お雇い外国人の外科医師シュルツェ氏を当分の間、博愛社の医員として救護活動に連れていきたい。」と岩倉に申請している。また、大給は、同日、華族の督部長の立場にある岩倉に「博愛社の設立が許可された場合、すみやかに負傷者の救助に着手したいが資金が乏しいので資金の援助をお願いしたい。」と申請している。

太政官は、四月一二日に陸軍省あてに博愛社の設立は差し支えないかを照会した。

休暇願と九州への出張

博愛社設立願書を太政官に提出した翌四月七日、佐野は元老院幹事あてに、博愛社を結社した場合、戦地で創傷者の治療看護の総括をするために、往復を除いて五〇日

間の休暇願を提出した。

佐野は、岩倉右大臣にも「小官家（佐野家）は代々医療を業としており、就中、外科を専門とし、門下の知人も少なくないので、上申した外国人の外科医師に従わせたい。また、広く同志者を募り自らこれを監督したい。」と休暇願の理由を具体的に述べている。

四月一〇日、太政官は佐野に「御用有之、九州筋へ被差遣候事。」と出張を命じた。佐野は元老院議員であるから、休暇願に対して特別な計らいで出張扱いになったと考えられる。この日、シーボルトは佐野を訪問しており、佐野の出発は四月一二日になった。

新橋停車場（新橋駅）には、松平乗承らが見送った。当時の新橋駅は、JR山手線新橋駅銀座口から徒歩五分程のところに旧新橋停車場鉄道歴史展示室（港区東新橋一―五―三）として復元されている。当時の横浜駅は現在のJR京浜東北線桜木町駅になる。

横浜から神戸に汽船で向かい、一日に神戸に到着した佐野は、神戸から京都に向かった。鉄道の開通は、新橋横浜間と京都神戸間だけであった。

当時、三条実美ら各大臣は天皇にお供をして京都に滞在していたので、佐野は京都で三条らに面会した。博愛社の設立について相談をしたと考えられる。佐野は、四月二三日に大阪から長崎に向かい四月二十九日に長崎に到着した。

太政官からの回答

日本赤十字社では、長い間、政府は社則第四条の「敵味方の別なく救護する」ということが理解されず、なかなか許可されなかったと伝えられており（『人道―その歩み日本赤十字社百年史』以下、『百年史』）、当時の関係者もそのような意味のことを述べているから信憑性をもって伝えられてきた。

しかし、陸軍省は、四月一九日、太政官に、博愛社が敵味方の別なく救護したいという設立の趣旨は「最も善美のこと（大変よいこと）と存ずる。」と前置きをして理解を示しながら、現地の軍病院では医員や看病人卒（看護手）等も備えて治療に差し支えがないこと、新たに博愛社を結社して救護員を戦地に派遣しても現地は混乱を生ずるであろうことを心配して「御差し止め願いたい（許可しないでいただきたい）。」と回答した。太政官は、現地が混乱することを心配した陸軍省の意見を尊重して、四月



征討総督本営（熊本地震前）

二三日に「願ノ趣、難聞届候事（許可することはできない）。」と回答したのが真相である。

陸軍卿山県有朋は、政府軍の征討総督を拜命した有栖川宮熾仁親王といつしよにいたから、陸軍省には西郷隆盛の実弟の陸軍卿代理陸軍中将西郷従道（従道）がいた。

また、外国人医師の同行については、ロシア人の軍医を断った経緯があるので、同様に断わるとしている。

博愛社の創立

佐野は、五月一日に長崎を出発して、その日に熊本の征討総督本営に到着し、持参した博愛社設立願書と博愛社社則を提出して博愛社の結社を申請した。参軍（陸軍卿、陸軍中将）山県有朋と高級参謀（陸軍大佐）小澤（小沢）武雄は賛成して、山県は多忙のために小沢が取り扱いを担当することになった。小沢の自伝には「即日、允許を与えた。」とあることから、小沢が征討総督有栖川宮熾仁親王と相談をして佐野に許可を伝えたと考えられる。日本赤十字社では、五月一日を「創立記念日」としている。この日、佐野は、有栖川宮親王には面会していない。

五月二日、佐野は葡萄酒五瓶を持参して有栖川宮熾仁親王に面会した。有栖川宮親王は元老院議長であったこと、佐野は元老院議員であるから、葡萄酒は陣中見舞いと考えられる。有栖川宮親王に随行している元老院少書記官戸田秋成の自書による『博愛社社員総会報告草案』には、この日佐野から願書を受け取ったとある。

五月三日、有栖川宮熾仁親王は、博愛社の設立を許可した。許可は、願書の末尾に朱書きで、「願之趣、聞届候事。但、委細ノ儀ハ軍團（軍団）軍醫（軍医）部長へ可打合候事。五月三日」となっており、征討総督本営の印影がある。その願書は、佐野が最初に持参したものではなく熊本県の野紙に書かれていることから、戸田少書記官の報告草案にあるとおり五月二日に改めて提出されたと考えられる。また、願書の日付は、許可になった五月三日と同じになっていることから、あとで書き加えたと考えられる。

征討総督府は、五月三日のうちに京都にいる太政大臣三条実美あてに博愛社の許可を電報で伝えた。佐野は、



有栖川宮熾仁親王銅像

坂の上の方にも公園の入口があり、そこからすぐのところには有栖川宮熾仁親王の騎馬像がある。上野の小松宮彰仁親王の銅像と同じ大熊氏廣（氏広）の作による。公園の地は、大正時代に有栖川宮家が廃絶して高松宮家が引き継ぎ、東京都に寄贈されて昭和五〇年（一九七五）に港区に移管された。

第一高等学校、熊本市中央区古城町（こじょうまち）にあった。昭和四五年（一九七〇）に水前寺成趣園（通称、水前寺公園）の東隣接地に「ジェーンズ邸」（日本赤十字社記念館）として移築保存されていたが、平成二八年（二〇一六）熊本地震で全壊して、令和五年（二〇二三）に水前寺成趣園南隣接地の水前寺江津湖公園の一角に「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」として移設復元された。現在の日本赤十字社医療センターの最寄り駅である東京メトロ広尾駅の一番出入口を出ると、すぐに広尾橋交差点があり、左に五分程行くと「港区立有栖川宮記念公園」がある。江戸時代には盛岡南部藩の下屋敷があったところで、上り坂を南部坂という。



博愛社設立許可の図（日本赤十字社所蔵）

翌五月四日に東京岩倉右大臣、東京大給議官、長崎県令（知事）北島秀朝（ひでとも）あてに電報を打っている。博愛社の許可を伝えたと考えられる。東京では、大給が多忙のために叔父の松平乗承が代理で受け取り、大給は佐野から電報で知らせが届いたとしている。

『博愛社第一報告』には「五月一日（中略）、准允（じゅんいん）の命を得たり。」「五月三日允許（いんきょ）を得たり。」とある。「准允」も「允許」も「許可」の意味であるから、五月一日に許可が伝えられ、五月三日に正式に許可されたと考えられる。

征討総督府の建物は、明治四年（二八七二）に建てられた熊本県内で最古の洋風建築「旧熊本洋学校教師ジェーンズ邸」で、当時、古城（ふるしろ）（現在の熊本

博愛社社則をつくった青年、平山成信

博愛社の設立願書に添えられた五か条の社則は、当時二四歳の青年、外務省一等属八等出仕の平山成信（のちの五代日本赤十字社社長）が起草した。

平山は、ウィーン万博の際に持ち帰った資料とシーボルトの助言を参考に作成したと考えられる。

「日本赤十字社紀要 本社の起源」（『日本赤十字社報告 明治二五年』）には、「彼我の別なく傷者病者を救護する一社を結ばんことを思い、大給と謀り、バロン（男爵）・ド・シーボルトに託して、奥国（オーストリア）救護会社の組織を調査し、社則案を起草し（以下略）」とある。

博愛社社則は、太政官に提出したものと熊本で提出したものでは第三条が異なっている。太政官に提出した際には東京から外国人医師を連れて行く予定であったから、標章を着用する人は「看病夫、運送人等は」になっており、熊本で提出した社則には「医員、看病夫等は」に変更されている。

博愛社々則

第一条 本社の目的は、戦場の創者（そうしや）を救うに在り。一切の戦事（かつ）は曾て之に干（かん）（関）せず。

第二条 本社の資本金は、社員の出金と有志者の寄附金とより成る。

第三条 本社使用する所の医員、看病夫等は、衣上に特別の標章を着し、以て遠方より識別するに便ず。

第四条 敵人の傷者（いそひ）と雖も、救い得べき者は之を収（おさ）べし。

第五条 官府の法則（きんじゆん）に謹遵するは勿論、進退共に海陸軍医長官の指揮を奉ずべし。

日本赤十字社の経営の基本は、博愛社社則第二条の本社の資本金は社員（会員）の出金と寄附金とよりなると、同時に決められたものである。

博愛社の救護活動

資金の準備と救護員の採用

五月三日、博愛社設立の許可を得た佐野常民は、自ら金一〇〇円を寄附し、五月四日に有栖川宮熾仁親王に五日から佐賀に向かう旨を挨拶した。

佐野は、旧佐賀藩主鍋島直大の家令（皇族、華族の家で事務、会計、使用人の管理等を行う人）に相談をして同家から金三〇〇円を借用した。収入には、五月一六日、金三〇〇円、他借をもつて当分出金と記録されており、後日返済している。

佐野は、五月一六日に佐賀から熊本に戻り、その日、綿撒糸二袋、縋帯木綿（白木綿）六反を救護用として博愛社に寄贈し、六月一五日に博愛社から軍団病院に寄贈された。

佐賀病院好生館から採用した救護員の医員小川良益（佐賀病院四等医、三〇歳、長崎県士族）、医員助津田一藏（一藏、二六歳、長崎県士族）、看護長（当初、看病夫取締兼庶務掛）江原益藏（益藏、三九歳、長崎県士族）、看護手（当初、看病夫）町浦富藏（富藏、四〇歳、長崎県平民）の四人（当時、佐賀は長崎県に属していた）は、五

月二二日に佐賀を出発して二三日午後六時に熊本の本荘村（熊本市本荘）にある佐野常民の宿舎に到着した。

標章「紅の丸」と救護活動の諸条件を決める

佐野は、博愛社の許可の際に指示されたとおり、軍団軍医部長（軍医監）林紀と相談をして、五月二五日に征討総督有栖川宮熾仁親王あてに博愛社の標章および諸条件を申請した。標章については、二七日に「伺いの通り」と許可されて標章図面三〇部を提出するように求められた。

博愛社普通ノ標章ハヒテ
紅丸一ヲ相用度且看病夫
等ニハ下ニ同面ノ通呈ニ寸
幅ニ寸五ヲノ標章ヲ肩腕ニ
貼付致サセ候



博愛社標章（日本赤十字社所蔵）

博愛社の標章は、軍医のしるしになつてゐる「白地に赤の横棒」の上に赤丸を加えて「紅の丸」にしたものである。紅は、あざやかな赤色をいう。日本赤十字社では「日の丸の下に赤の横棒をつけた」（『百年史』）と伝えられているが、日の丸ではない。

肩章の大きさは、縦二寸（約六センチ）横二寸五分（約七・五センチ）で、医員は標章の右上に黒丸を、事務係は標章の右上に青丸を加え、看護手は標章そのままを使用した。

また、医員等が戦場に出張（現地で活動）の際は、軍医等に準じて寝具、食料等を支給していただきたいと願い出たが、これについてはその都度軍団軍医部長に申請することと回答された。

救護員の届出

佐野は、五月二七日に林軍団軍医部長あてに、医員小川良益、医員助津田一蔵、看護長江原益蔵、看護手町浦富蔵を熊本軍団病院へ派遣するので、関係者への周知方をお願いしたいと届け出た。医員深町亨は、長崎軍団病院へ派遣することにした。

熊本

熊本軍団病院における救護活動の開始

看護長兼庶務掛^{かかり}江原益蔵の日記『西南ノ役ノ有様、其他ノ事務』および救護日誌「明治一〇年五月、熊本日録創者救済録」^{ぞうしや}（『熊本、長崎支局日誌』）には、医員小川良益、医員助津田一蔵、看護長江原益蔵、看護手町浦富蔵の四人は、五月二八日に熊本軍団病院から通行鑑札（通行証）を渡されて、佐野常民に同行して軍団病院に出勤し、博愛社の救護活動が開始されたと記録されている。

『日本赤十字社史稿』（以下、『社史稿』）には、「（五月）二七日を以て之^{もつ}（小川、津田、江原、町浦）を熊本軍団病院に派出し（中略）、救療に従事せしむ。之を本社業務の開始となす。」となっているが、明治一二年（一八七八）四月五日調べの「医員看護手慰労金取調調書」（『西南征討救護関係』其二ノ二）の「五月二七日より熊本軍団病院へ勤務」を根拠にしていると考えられる。

旧熊本藩主、博愛社へ二人の医員を派遣

六月一五日、旧熊本藩主細川護久（五二万石）は、博愛社を援助するために二人の熊本県士族、三浦齊（齊、二四歳）と竹崎季薫（二二歳）を博愛社に派遣することを申し出た。

二人は、熊本医学校（現在の熊本大学医学部）でオランダ医師マンスフェルトの三年間の課程を卒業して、三浦は蘭学と英語を極め、竹崎は治療に習熟している。博愛社は二人を医員助に採用して、三浦煥軍医正の指示で六月一六日から熊本軍団病院に勤務した。経費は細川護久が負担した。

ボランティア医員二人

七月二日、中島愿仙（二五歳、群馬県平民）は、自費により戦地で負傷者の救護に従事したいと博愛社に申し出、七月一〇日に長崎で行なわれた佐野と松平乗承の会談で派遣が決定された。また、七月三十一日、福岡正之（鹿児島県士族、旧高鍋藩士）は、元老院議官秋月種樹を通じて医業専修中であるが自費で看護手（当時、看病夫）として従事したい、その後、医員助に採用していただければ本望であると申し出た。秋月は、

旧高鍋藩主の弟である。福岡は、鹿児島県士族であるから、薩軍に通ずる等の行為はしないと念書を提出している（当時、宮崎は鹿児島県に属していた）。八月一日の博愛社委員の会合で承認され、福岡の旅費は同郷の秋月種樹が負担した。

天然痘の予防

六月一五日、三浦煥軍医正から征討総督本営の戸田少書記官（博愛社の事務を委託）に、三田井村（宮崎県西臼杵郡高千穂町、当時、鹿児島県に所屬）付近で天然痘（疱瘡）が流行しているので、種痘（予防接種）のために博愛社の医員を派遣してほしいと依頼があった。

六月一九日、熊本軍団病院に勤務したばかりの医員助三浦齊は、三田井村大綱帯所へ出張して一か月近く勤務し、七月一四日に医員助竹崎季薫が交代して出張した。竹崎は、八月六日に父病氣のために帰県したが、八月八日に他の救護員とともに八代軍団支病院へ出張を命ぜられた。

薩軍患者の救護

七月一日、医員小川良益、看護長江原益蔵は、薩軍患者を担当するために熊本軍団病院から熊本軍団支病院に転勤した。

七月二日夜二時、薩軍患者三十六人が熊本軍団支病院に到着した。同日午前一〇時、熊本軍団病院から六人が転院、一人が死亡、一人が退院した。転院の六人を含めて患者四〇人は薩軍患者と考えられる。看護長江原は七日に第五舎から第二舎に転務して一四日まで在勤した。

博愛社マーク事件

七月二三日に熊本軍団支病院に採用されて勤務したばかりの看護手河野眞澄（真澄）は、二九日夕刻に白川^{しろかわ}にかかる長六橋哨兵所^{しょうへいじょ}（検問所）で、博愛社の肩標を着用している者は通行させることができないと呼び止められた。河野は、止むを得ず肩標をはずして帰院したが、八月一日に指令違いが判明して従前どおりに肩標を着用した。

出張救護と患者の護送

八月八日、医員小川を除く熊本軍団病院勤務の全員（医員助津田、竹崎、看護長江原、看護手町浦）と熊本軍団支病院勤務の看護手河野の計五人は、八代軍団支病院へ出張を命ぜられ、九日、さらに人吉大綱帯所へ出張を命ぜられて、一日午後一時に到着（医員助竹崎は八代軍団支病院に残り一八日に到着）した。ここでは、薩軍から降伏した人吉の医員三人も勤務していた。

九月四日、医員助竹崎は、人吉大綱帯所から患者四〇人を加治木軍団支病院へ護送して、同院第九舎一〇〇〇人の患者を担当し、一〇月八日に阿弥陀寺分派病院に転勤した。その後、竹崎は、水俣虎列刺^{みなまたコレラひ}避病院へ派遣された。

熊本では、五月二八日の救護開始から一〇月三十一日終了までに、熊本軍団病院、熊本軍団支病院、人吉大綱帯所、八代軍団支病院、阿弥陀寺分派病院、水俣虎列刺避病院の六か所で、延べ二二人の救護員を派遣し、取扱患者数は、竹崎が担当した延べ一四〇人（救護患者一〇〇人、護送患者四〇人）だけが記録されている。

長崎

長崎軍団病院

五月下旬に医員深町亨が採用されて長崎軍団病院に派遣された。深町の手紙によれば、七月二〇日に銃傷患者の長崎軍団病院第二副舎（筑後町宗福寺）に勤務した。

七月二〇日、佐賀病院好生館から医員助持永精齊（精齊）、看護手山口福次郎、中野順吉、蒲原幸三が到着して勤務した。在院の銃傷患者は三八人で、この日、鹿児島から一六人が入院した。七月二八日、佐賀から医員助吉木謙三が第二副舎に到着して勤務した。

志願（ボランティア）の医員助中島愿仙は、八月六日に第二副舎に勤務し、同じく志願の看護手福岡正之は、翌八月七日に第二副舎に勤務して二日後の八月九日に看護手から医員助に昇格した。

八月九日、深町は、「賊の患者治療のため、私を除くのほか、医員、看護夫（後の看護手）、皆、鹿児島へ遣わす。」と佐野あてに電報を打っている。翌八月一〇日に医員助持永、吉木、中島、福岡、看護手山口、中野、蒲原の七人は、鹿児島軍団支病院へ出張を命ぜられた。

長崎軍団病院第一副舎（通称、長崎博愛社病院）

八月一日、博愛社社則附言を決定して陸海軍軍医長官と協議の上、八月一日に政府（太政大臣三条実美あて）に届け出た。

八月一四日夕方、佐野常民邸に陸軍軍医総監松本順、博愛社委員元老院議員秋月種樹ほか一〇数名が会合して、最も悲惨な戦地に博愛社の仮設病院等を設置することとし、櫻井（桜井）忠興（旧尼崎藩主）を博愛社委員総代に、工部省に勤務していた広島県土族原田隆造（三二歳）を博愛社委員心得に採用して、高塚友義を司計（会計）に、藤田圭甫を医員長に、郡豊を医員、大波治卿、高松隆金を医員助として、明八月一五日正午に新橋停車場に集合して九州へ出張することに決定した。

八月一五日、新橋から横浜へ、横浜から船で九州へ向けて出航し、一七日午前五時に神戸に入港すると、桜井、藤田、原田、高塚は、七月九日に太政官から京都に出張を命ぜられていた大給を大阪に訪ねて、大阪陸軍臨時病院に到着し、佐藤進軍医監（病院長）、石黒忠憲軍医正（のちの第四代日本赤十字社社長）に面会して入院患者を慰問した。

桜井らは、神戸に戻り一八日に神戸から長崎へ向けて出航して、一九日午後七時に



福濟寺

原田は、八月一四日から八月三二日に第一一副舎が福濟寺に移転するまでを「西地出発日誌抄 長崎支局」(『熊本、長崎支局日誌』)として記録し、九月四日に報告している。

長崎に到着した。

二〇日に北島秀朝^{ひでとも}長崎県令、緒方惟準^{これよし}軍医正(緒方洪庵次男)と協議した。当初、鹿児島県に博愛社の仮病院を設置する予定であったが、午後七時に桜井、原田から佐野あてに、近日中に鹿児島病院その他も長崎へ引き揚げるはずであるから、本社(仮病院)は長崎に設ける方がよろしいと電報で報告し、さらに翌二一日に、博愛社は明日から長崎軍団病院の出島キニフル製茶所にある第一一副病舎すべての患者一六〇人と薩軍の傷者一〇余人を受持つことに緒方と協議が済んだと佐野あてに電報した。

八月二三日、原田は緒方軍医正と詳細を打ち合わせた。博愛社の社旗は、軍団病院が掲げていなかったことから同様に掲揚しないことにした。

救護活動(医務)は、八月二四日に開始された。引き受けた患者現員は九一人である。

八月二五日、佐野は、桜井、原田、医員長藤田圭甫の三人あてに「市中、殊に居留地近傍の病院御請取^{おうけとり}にては、患者の取締^{とりしまり}、空氣の清浄等、尤も御注意を要す(中略)」。能く、緒方医正(軍医正)と御協議、諸事精密なるべし。」と電報で注意を促すとともに、八月二七日に、桜井、原田、高塚あてに手紙を送って患者施療上の心得を示した。手紙は、九月一日に受領されている。

「(前略)第一、創処^{そうしょ}の施術^{しじゆつ}、其精妙^{その}を尽くすは勿論、衣服の清潔、飲食の節度、病室空氣の流通^{ゆうつう}、遊歩^{ゆうほ}の適度、より費用支出の得失に至る迄、勉^{つとめ}て其宜^{そのよろしき}を得ざる時は、忽^{たちまち}、傍人^{ぼうじん}の誹議^{ひぎ}(誹謗)を来^{きた}し、当社の素旨^{そし}(本志)に悖^{もつ}り、遂に本社興廢にも関する一大至難の要件^{これありそつう}に有^あ之候(後略)」とし、外国人も時々病室等を視察するであろうから病室はもちろん治療も正しく整えて創者の信頼を得るとともに、人々の愛顧に応えるようにしたい。それには誠意を尽くすようにしたいという内容であった。

八月三一日、長崎軍団病院第一一副舎は、午前九時に出島から下築後町の福濟寺に移転が完了して、佐野あてに電報で報告した(電報は上築後町になっている)。

第一一副舎の八月二四日から三一日までの患者数は、入院一二二人、退院六人、転院二人、死亡五人で、三一日の現員は九十九人（傷者四五人、平病患者五四人）である。九月一日から三〇日までの患者数は、入院一三九人、退院五七人、転院一人、死亡一〇人で、三〇日の現員は七一人（傷者三五人、平病患者三六人）である。

一〇月一六日、長崎軍団病院は長崎臨時病院に改称されて、二三日に一八人を退院させ、二六日に七人を第一副舎に転送した。

一〇月一日から三〇日までの患者数は、入院七六人、退院六三人、転院五人、死亡四人で、三〇日の現員の傷者（銃創患者）四人は三一日に本部病院の残員に合併して、長崎における救護活動が終了した。

長崎では、長崎軍団病院第一副舎、第二副舎、第三副舎、第七副舎、第一一副舎、第一二副舎、第一三副舎の七か所で、延べ一三六人の救護員を派遣し、取扱患者数は、延べ三五八人（救護患者三五八人、護送患者〇人）が記録されている。

第一一副舎として使用された福濟寺は、昭和二〇年（一九四五）に原爆で焼失して、長崎駅から徒歩一〇分の高台（長崎市筑後町）に再建されている。

鹿児島（宮崎を含む）

鹿児島軍団支病院等

八月一〇日に長崎軍団病院から鹿児島軍団支病院へ出張を命ぜられた医員助持永、吉木、中島、福岡、看護手山口、中野、蒲原の七人は、八月一四日に鹿児島軍団支病院に到着した。この日、軍医部を都ノ城に移転することになり、七人は鹿児島を出発して一五日午前三時に福山（霧島市福山町）に到着して、午前六時に三浦煥軍医正に随行して午後五時に都ノ城に到着した。

征討総督本営は、一八日に都ノ城から宮崎に移転することになり、軍医部の指揮により都ノ城軍団支病院の患者一八五人を、中重症患者一三人、除役退院一五五人、使役退院一七人に分けて、中重症患者一三人を鹿児島軍団支病院に護送して帰院した。

八月二四日、医員助松山蘇元、中山壽仙（寿仙）、看護手梅北五郎、園田大助の四人を採用して鹿児島軍団支病院に派遣した。

八月一九日から二八日まで鹿児島軍団支病院の患者数は、入院四八人、退院三人、死亡五人、現員四〇人である。

持永精齊の報告によれば、九月一日に細島軍団支病院から大阪まで医員助持永、吉木、看護手蒲原、梅北が患者一七八人の護送を命ぜられて、二日午前一〇時に細島港（宮崎県日向市）から熊本丸に乗船して大阪へ出航した。

三日、波が荒れて午後四時に神戸に入港し、午後五時二十五分発の汽車に乗り、午後八時に大阪軍団臨時病院に入院した。持永、蒲原、梅北は、九月一七日に長崎軍団病院第一一副舎へ帰院した。

九月一四日、医員郡豊、医員助大波治卿は、桜島軍団支病院へ出張し、郡豊は九月一七日に患者三人を大阪へ護送して九月二四日に長崎軍団病院第一一副舎に帰院し、二八日に長崎軍団第一三副舎虎列刺避病院へ転勤した。

医員助大波は、桜島軍団支病院から九月二一日に患者九七人を大阪へ護送して九月二七日に桜島軍団支病院に帰院した。

九月八日、医員助津田、看護手町浦、河野は、加治木大綱帶所および仮病院に出張して一〇月三日に下荒田仮病院へ患者を護送した。

鹿児島では、鹿児島軍団支病院、都ノ城軍団支病院、細島軍団支病院、加治木大綱帶所、坂本仮病院、下荒田仮病院、桜島軍団支病院、障子川木村仮病院（虎列刺病院）、

三田井村仮病院、富高新町の一〇か所で、延べ四一人の救護員を派遣し、取扱患者数は、延べ九三一人（救護患者五九一人、護送患者三四〇人）が記録されている。

コレラ患者の救護活動

九月に清国（現在の中国）の厦門あもいから長崎に入港した外国船の乗組員がコレラにかかって死亡したのを発端に、人と人との接触を通して、殊に西南戦争において兵士間でコレラが伝染して、長崎から九州全域、さらに神戸、大阪その他の地域へと広がった。

博愛社のコレラ患者の救護活動は、西南戦争の救護地である熊本、長崎、鹿児島で行なわれた。

熊本県権令（知事）富岡敬明けいめいは、熊本鎮台病院（征討軍団本部病院）へ医員の派遣を依頼、三浦軍医正の紹介で博愛社医員助竹崎季薫が一〇月一〇日に阿弥陀寺分派病院から鹿児島県境に近い水俣虎列刺避病院みなまたコレラひへ出張した。

桜島軍団支病院から大阪へ患者を護送して九月二四日に長崎軍団病院第一一副舎へ帰院した医員郡豊は、九月二八日から一〇月四日まで長崎軍団病院第一三副舎虎列刺避病院コレラひに勤務し、その後、医員助持永が第一一副舎から第一三副舎虎列刺避病院

院に転勤して一〇月四日から三一日まで勤務した。

九月一七日から一〇月三一日までの長崎軍団病院第一三副舎虎列刺避病院の患者数は、入院七五人、退院三一人、死亡四四人であった。

鹿児島では、一〇月一日に医員助大波が障子川木村仮病院（虎列刺病院）に勤務し、一〇月四日に桜島軍団支病院へ出張し、五日に長崎へ患者を護送して一四日に長崎軍団病院第一副舎に帰院した。

医員助津田、看護手町浦、河野は、一〇月六日に障子川木村仮病院（虎列刺病院）に勤務して、医員助津田と看護手河野は一〇月一六日に熊本軍団病院へ帰院し、看護手町浦は一〇月八日に病氣により辞職した。

九月一五日から一〇月八日までの障子川木村仮病院（虎列刺病院）の患者数は、入院二五八人、退院七三人、転院四人、死亡六一人で、現員二二〇人となっている。

一〇月二日、博愛社委員心得原田隆造は、長崎電信分局から佐野、大給あてに「各舎へ出したる看病夫（救護員）一〇〇余名あり。今日まで我が持場には虎列刺一名もなし（後略）。」と、博愛社が担当している病舎で新たな感染者や救護員で感染した者がいないことを電報で報告して、救護活動が終了したような印象を与えている。

佐野は長崎出張中の桜井忠興、原田隆造あてに「（前略）本社引受の病舎には虎列刺病なき由、予防のつつなる（継続し続けている）を知る。なお、ご注意あれ（後略）。」と返電している。この時点では、まだ、熊本、長崎、鹿児島でコレラ患者の救護活動が続けられていた。

一〇月一〇日に阿弥陀寺分派病院から水俣虎列刺避病院へ出張した医員助竹崎季薫は、『社史稿』によれば一〇月二四日に任務を終了したとなっている。

しかし、竹崎季薫は、博愛社の救護活動がすべて終了したとされる一〇月三十一日以降も水俣虎列刺避病院で救護活動を続けており、十一月二一日午後七時に熊本に帰着して二二日に熊本県に報告をしたと考えられる。

熊本県権令（知事）富岡敬明から佐野常民あての礼状には十一月二二日に竹崎が水俣から帰熊したとある（『西南征討救護関係』其二ノ二）。佐野と大給は、富岡権令からの礼状によって竹崎が水俣虎列刺避病院で救護活動に従事していたことを承知して、一二月八日に連名で細川護久あてに本社の名誉であると礼状を送っている。

博愛社の救護員

博愛社の救護員数は、八月一五日までは実数一五人で、熊本に七人（内一人が職を辞している）、長崎に一人、鹿児島に七人となっている。

八月一五日以降は、東京から救護員が出張したこと、および資金を持参したことで救護員の増員が可能になった。

救護員実数は、「医員長一人」藤田圭甫、「医員三人」小川良益、深町亨、郡豊、「医員助一人」津田一蔵、三浦斉、竹崎季薫、持永精斉、吉木謙三、中島愿仙、福岡正之、大波治卿、高松隆金、松山蘇元、中山寿仙、日野謙次、川村寛治、山崎哲、川口勇、高宮時之助、山田正、橘謙良、「看護長一人」江原益蔵、「看護手七人」町浦富蔵、河野真澄、山口福次郎、中野順吉、蒲原幸三、梅北五郎、園田大助、「看病夫九六人」、合計一二六人（延べ一九九人）で、二三か所の救護所で、取扱患者数（記録されている者）一千四二九人（救護患者一千〇四九人、護送患者三八〇人）、支出した経費は七千〇四〇円となっている。

医員長藤田圭甫は、現在の東京都港区、東京慈恵会医科大学附属病院の付近にあった東京府病院（当時、東京府芝区）の医員で月俸は六〇円、佐野は東京府知事に依頼

をして博愛社医員に採用し、博愛社から加給として月俸四〇円を支給した。藤田は、救護活動終了後に東京府病院に復帰した。

医員小川良益と郡豊は、月俸三〇円。深町亨と佐野との関係は不明であるが、深町には俸給ではなく五月から九月までの五か月間の合計で謝金として五〇円を支払っている。

医員助の月俸は、津田が三二円、持永、大波、高宮は一五円、吉木、高松、松山、中山、川口、山田は一〇円、日野、川村、山崎、橘は日給二五銭で、三浦、竹崎は細川護久が負担、中島、福岡は志願（ボランティア）で無給である。

看護長江原は、月俸一八円。看護手は、山口が月俸五円五〇銭、町浦、河野、中野、蒲原、梅北、園田は月俸五円である。救護員には、このほかに夏冬の衣服代が支給された。

看病夫は大倉組（現在の派遣業者に当たる）から派遣されており、博愛社は大倉組に一人当たり日給として二〇銭を支払っている。

明治十一年（一八七八）、博愛社は、勤務日数一か月未満の医員助川口勇、橘謙良および日雇い看病夫九六人を除く救護員二八人に、総長名による感謝状と記念品を贈った。

使用した医薬品

博愛社は、八月一五日、医薬品および器材二三箱を新橋から横浜へ汽車で運び、横浜からは蒸気船で長崎に輸送した。薬品・器材の購入金額は、九八七円八九銭八厘で、東京・本町三丁目（現在の日本橋室町付近）の鰯屋、岩本五兵衛から購入した。医員長、医員、医員助、看護長、看護手（看病夫を除く）の全救護員、全期間の俸給の合計額に相当する。東京メトロ銀座線三越前駅を下車して、日本橋三越本店と反対側のA9出口を出ると室町三丁目南の交差点があり、出口から右へ一分で武田薬品工業（株）グローバル本社があり、道路脇に「薬問屋の集積地・本町」の説明板と「本町薬問屋発祥の町」の石碑が建っている。江戸時代から明治時代にかけてこの付近は薬問屋が集中しており、現在でも大手の医薬品業者が集中している。

医薬品は、博愛社が担当した長崎軍団病院第一副舎で使用された。当時、西洋医学が推奨されていたが、西南戦争当時に博愛社が使用した医薬品は九九種類で、和漢薬と西洋の薬がほぼ半々になっている。

薬の量の単位はグラムやミリリットルではなく、質量（重量）はポンド、オンス、液量はパウンド、オンスが使用されている。

東京

仮事務所を設置

熊本の佐野から大給あての書留郵便は、六月一八日に大給に届いた。大給は、六月二三日に岩倉右大臣に博愛社が五月三日に許可になったことを念のために報告した。

六月二五日、大給松平一族一三家の代表（代理を含む）は、麹町区（千代田区）富士見町四丁目九番地の旧尼崎藩主（兵庫県尼崎市）櫻井（桜井）忠興邸に集合して、大給恒から博愛社の主旨について説明があり全員が賛成した。

翌六月二六日、大給松平一族一三家は、再び桜井邸に集合して全員の同意を再確認するとともに、桜井邸に事務所を置くこととし、事務所に必要な金品を寄贈して博愛社に入社と記録されている。桜井忠興は、博愛社に金一千円を寄附している。

大給松平一族一三家とは、旧肥前国島原藩七万石・松平忠和（二七歳）、三河国西尾藩六万石・松平乗承（二七歳）、信濃国上田藩五万三千石・松平忠禮（忠礼、二八歳）、丹波国亀山藩（改称・亀岡藩）五万石・松平信正（二六歳）、摂津国尼崎藩四万石・桜井忠興（三〇歳）、豊後国杵築藩三万二千石・松平親貴（四〇歳）、美濃国岩村



櫻井神社

大阪（梅田）駅から阪神電気鉄道（阪神電車）阪神本線に乗り、尼崎駅西口を出て南へ徒歩五分程のところに「尼崎城・尼崎城址公園」があり、平成三〇年（二〇一八）に新たに尼崎城が建立されている。そこからすぐ南の開明橋交差点脇に櫻井（桜井）神社が建っており、桜井松平家の尼崎藩初代藩主から桜井忠興までをまつている。

加したために、明治元年（一八六八）一二月に政府から隠居させられて、弟信安が家督相続をしている。

JR中央線・総武線飯田橋駅西口改札口を出て外堀に沿って新宿方面に進むと、五分程で東京通信病院に着く。桜井忠興邸があったところで、病院敷地内の道路脇に「日本赤十字社発祥の地」の案内板がある。令和元年（二〇一九）五月に立札から案内板になった。



日本赤十字社発祥の地 案内板

藩三万石・松平乗命（乗命、三〇歳）、出羽国上山藩二万七千石・松平信安（一三歳）、豊後国府内藩二万一千二〇〇石・大給近道（二四歳）、上野国小幡藩二万石・松平忠恕（五三歳）、信濃国龍岡藩（旧三河国奥殿藩）一万六千石・大給恒（三九歳）、但馬国村岡藩一万一千石・山名義路（一八歳）、上総国桜井藩一万石・瀧脇（滝脇）信敏（二七歳）である。

松平信安（出羽国上山藩）は、『社史稿』では松平信庸になっているが、信庸は戊辰戦争の際に明治政府に対抗して奥羽越列藩同盟に参

ゴマ一樽の代金一二円一〇銭

明治一〇年（一八七七）六月二三日、東京の銀座にあった朝野新聞の海内新報欄に、博愛社設立願書と社則の記事が掲載された。

深川八右衛門新田（現在の東京都江東区北砂付近）に住んでいた笠原左一郎母・半は、新聞で博愛社設立のを知り、栽培している白ゴマ一樽を寄付したい、手舟で運びたい、志をおくみとりいただきたいと二四日午前六時投函の手紙で申し出た。

当時、博愛社の事務所は、桜井忠興邸にあったから、手舟を漕いで小名木川から隅田川を上り、神田川を上って牛込見附の神楽河岸（現在の飯田橋駅付近）までくれば、そこからすぐである。博愛社は、慈善の志に感謝し、現地では何が必要かわからないので、できれば現金の方がよいと回答している。博愛社が現物をいただいて現金に替えたのか明らかでないが、二五日に白ゴマ一樽を売った代金一二円一〇銭が寄附された。民間人の寄附の第一号で、西南戦争の救護活動に従事した博愛社の医員助一か月分の俸給に相当する。手紙は判読不明のところがあると注釈が加えられている。

また、本人は匿名を希望したが、六月二七日付の「郵便報知」に、博愛社設立願書と社則および笠原半のことが掲載された。それによると「東京府下の遠村に居り、殊

に婦人の義（中略）、有志者の魁^{さきがけ}を為したる慈善の精神、感心の義（中略）、一着（第一位）を譲らざるを得ず。」とある。明治一〇年の博愛社の社員（会員）三十八人の前に笠原半の名前が記載されている。

後日、鹿児島では、一〇月七日に梅北五郎に黒ゴマ二升五合を三七銭五厘で購入させて、長崎から持参したゴマと合わせ、これを炒って塩をまぶし、紙を買って袋をつくり、ゴマを茶碗で量^{はか}って入れて糊で封をし、ゴマ塩五〇〇袋を鹿児島県庁に届けて患者に寄贈した。これは、東京で笠原半がゴマを寄附したいと申し出たことを尊重して、その厚意に報いることにしたものである。

長崎で佐野と松平乗承が会談

東京では現地の状況が、現地では東京の状況がわからないので、松平乗承は七月四日に新橋を出発して、七月八日夜一二時に長崎港に到着し、九日午前八時に佐野を訪ねて東京の状況を報告した。また、東京から二千三〇〇円を持参した。一〇日正午から松平、佐野、戸田少書記官、緒方軍医正、医員深町亨が会談をして、平民を社員に加えてよいこと、自費で救護に従事したいという救護員は現地に派遣してよいこと、

笠原半のゴマの寄附金は意思を尊重して現地でゴマを購入して寄贈すること、松平が持参した二千三〇〇円は長崎へ七五〇円、熊本と鹿児島で一千五五〇円を割り当てて救護員を増員し救護を拡張すること等を決めた。松平は、一二日に佐野に同行して征討軍団病院本部を訪れて、緒方軍医正の案内で各病室の患者を慰問して七月一九日に東京に帰着した。松平乗承自筆の救護報告書は、日本赤十字社「赤十字情報プラザ」に展示されている。

佐野には外務省から電報で帰京するように依頼があり、七月二五日に帰京した。

政府の追認

七月三十一日、太政官書記官から佐野議員（佐野常民）あてに「先般ご上申の博愛社設立の件（四月二三日、右大臣岩倉具視から許可できないという通知）、ご指令は取り消しになるはずであるから書面を太政官に返却いただきたい。」と通知があった。同日、佐野は、太政官書記官に書類を返上すると回答した。

翌八月一日、谷森少書記官から佐野議員あてに「ご上申書ご指令が取消しになったので、岩倉右大臣あての願書は返却する。」と通知があり、政府は事実上八月一日に博

愛社の設立を追認した。

皇室から金一千円を下賜

八月七日、宮内省より佐野に連絡があり参省したところ、「今般博愛社結社の趣、きこしめされ被聞召、きとくの奇特之儀に付、おぼしめし思召を以て金千圓下賜候事。えんかしそうこうこと明治十年八月七日、宮内省」と恩賜があった。

皇室からは、その後、明治一六年（一八八三）に「皇后宮 おぼしめし思召を以て自今年々金三百圓下賜候事。」と恩賜があり、明治二〇年（一八八七）に天皇后から本社補助として年々金五千円、明治三二年（一八九九）三月から年々金五千円が増賜されて、皇室から毎年一万円が下賜されてきた。

これとは別に、病院維持費として明治二四年（一八九一）に天皇后から年々金五千円が追加で下賜されている。

明治三五年（一九〇二）に創立二五周年を迎えた日本赤十字社は、社長佐野常民の資金蓄積の方針の遺囑を受け継いで、明治三六年（一九〇三）から明治四五年（一九一二）までの一〇年間に資金一千五〇〇円を蓄積することとし、その目標が達成されたので

皇室から下賜されていた本社補助金を辞退した。

総長に東伏見宮嘉彰親王を推戴

明治一〇年（一八七七）八月一日に博愛社社則附言を決定して、総長、副総長、幹事等を置くこととし、八月一五日に議官佐野常民、議官大給恒の名をもつて東伏見宮嘉彰親王（のちの小松宮彰仁親王）^{よしあきしんのう こまつのみやあきひとしんのう}あてに総長の就任を懇請した。九月一五日、熊本電信分局から「博愛社総長の義、東伏見宮御承諾に相成りたり。」との電報が、戸田少

書記官から佐野議官あてに送られた。当時、東伏見宮は鹿児島に在りと付記されている。



小松宮彰仁親王銅像

九月一三日付の東伏見宮親王から大給恒、佐野常民あての総長承諾の親書は、救護活動が終了する直前の一〇月八日に東京に届いた。副総長には、佐野と大給が就任した。

東伏見宮嘉彰親王は、明治一五年（一八八二）に小松宮彰仁親王と改名された。

小松宮彰仁親王の銅像は、JR山手線上野駅公園口から真つすぐ五分程進むと上野動物園入口の手前左側にある。この場所は寛永寺の鐘楼跡^{しょうろう}で、銅像は彫刻家大熊氏広によつて製作された。

正面から少し右側に回ると、脇に「コマツオトメ原木」の石碑と、ここで発見されたという桜の新種「コマツオトメ」がある。「ソメイヨシノ」よりも少し早めに満開になる。

本社を永設の団体に

明治一一年（一八七八）一月一四日、新年の開社式を行なった際、総長小松宮親王（当時、東伏見宮親王）は、戦時平時における本社の任務として、一つは平時から戦時救済の方法として創者救済に必要な物品と金銭を蓄えること、一つは平時患者救済の方法を研究して善処することを述べ、一〇月二八日、博愛社は永設の団体にすることを印刷して全国に配布した。

第三章 ジュネーヴ条約の加盟と日本赤十字社

ジュネーヴ条約への加盟

加盟の準備

明治一二年（一八七九）一〇月一日に開催された社員総会で、佐野はジュネーヴ条約（赤十字条約）にふれて、欧州赤十字社について研究すると述べた。

さらに、佐野は、明治一五年（一八八二）六月二六日に開催された博愛社第二回社員総会で「博愛社の主旨は人の至性しせいに基づくの説」と題して講義し（『博愛社講義筆録』には五月二六日とある）、慶応三年のパリ万国博覧会の際に赤十字社が内外の兵を選ばず（敵味方の別なく）負傷者を救護することを見聞したこと、明治六年のウィーン万国博覧会では赤十字社が発展していることを知り、「文明や開化といえは、人はすぐに法律の整備や精密な機械の発達を證あかし（証）というが、私は赤十字のような事業がこのように盛大に発展することこそが、その証ではないかと思う。」と述べて、さらに、諸君とともに尽力して「ゼネーブ（ジュネーヴ）条約」に同盟するの日を期待せんと希望を述べた。

明治一六年（一八八三）五月にベルリンでドイツ衛生救難博覧会が開催されることになり、内務省御用掛の柴田承桂しょうけいが派遣されることになった。

明治一六年四月七日に開催された社員総会は、総長小松宮親王が、本社の目的は国内にとどまらず規模を拡大して欧州赤十字社と交流することであり、そのためにはジュネーヴ条約に加盟する順序と欧州赤十字社について調査すると述べ、佐野も柴田に委託する調査内容について述べて、四月一二日に直接柴田に面会をして依頼した。

また、ベルリン滞在のシーボルトにもジュネーヴ条約加盟の手続きについて調査を依頼し、博覧会の出席者に配付する『日本東京博愛社略記（博愛社略記）』をドイツ語とフランス語に翻訳することを依頼した。

柴田は、明治一七年（一八八四）五月六日に帰朝報告をして、六月二六日に開催された社員総会で「欧州赤十字社概況」と題して演説し、ジュネーヴ条約に加盟しようとする政府はジュネーヴ政府に希望を申請する必要があると述べた。演説の内容は『柴田承桂演説 欧州赤十字社概況』として印刷されている。

ジュネーヴ条約の加盟

明治一七年（一八八四）二月、陸軍卿（大臣に相当）大山巖（巖^{いわお}）は、各国兵制視察のために渡欧することになり、軍医監橋本綱常^{つなつね}が政府においてもジュネーヴ条約加盟の必要を感じて、陸軍衛生制度の調査として大山に随行することになった。

出発する一週間前の二月一〇日、博愛社は橋本にジュネーヴ条約加盟に関する手続きと欧州における赤十字事業の調査を依頼した。

橋本は、渡欧中、ジュネーブにおいて開催された第三回万国赤十字会議（赤十字国際会議）にシーボルトとともにオブザーバーとして出席した。

大山、橋本は明治一八年（一八八五）一月二五日に帰国したが、その前に博愛社は明治一七年（一八八四）十一月四日にシーボルトから調査報告の手紙を受け取った。

博愛社は、一月二五日に開催された社員総会において政府にジュネーヴ条約への加盟を働きかけることとし、明治一七年（一八八四）十二月に『歐洲（欧州）赤十字社日内瓦府公約ノ締盟ヲ請フノ建議』として博愛社総長名で政府に建議書を提出した。

橋本綱常は、帰朝後、五月二日に陸軍軍医総監になったが、六月二四日に政府に『赤十字社ノ儀ニ付調査』としてジュネーヴ条約への加盟手順を詳細に報告した。

明治一九年（一八八六）六月五日、瑞西連邦駐節^{スイス ちゅうさつ}（駐在）日本特命全権公使侯爵蜂須賀茂韶^{はちす かもあき}は、スイス連邦の首都「ベルヌ府」（ベルン）においてジュネーヴ条約の加盟告知書に記名調印をして、政府は一月一五日に号外勅令により「ジュネーヴ条約（赤十字条約）」に加盟したことを公布した。

日本赤十字社

日本赤十字社に改称

明治一九年（一八八六）一二月八日、社則改正取調委員に、委員長花房義質、委員平山成信、柴田承桂、清水俊、アレクサンダー・シーボルトを任命して、七回の会合を経て明治二〇年（一八八七）三月一五日に成案を得、三月二五日に臨時社員総会を開催して改正社則を議決し、四月中に宮内、陸軍、海軍の三省の認可を得た。社則には、全国各県に支部等の組織を置くことも含まれている。

明治二〇年（一八八七）五月二〇日、日本赤十字社第一回社員総会が飯田町の本社



日本赤十字社紋章

想像上の霊鳥である鳳凰は、梧桐（青桐）に棲み、竹の実を食べ、霊泉を飲むと伝えられている。我が国では青桐（アオギリ属）のかわりに桐（キリ属）が使用されている。

昭和五二年（一九七七）の日本赤十字社創立一〇〇周年までは、赤十字のしるしは、本社を

その由来については、笠原光雄（博愛社時代から庶務を担当し、総務部副長、第一部副長、常議員・理事）の談話で、「佐野常民（初代社長になる）が皇后陛下（後の昭憲皇太后）に拝謁された折に、恐れ多きことながら何かの紋章をいただいて社の紋章をつくりたいとお伺いしたところ、かんざしに描かれている桐竹鳳凰の模様を賜った。」と伝えられている。

日本赤十字社では、「皇后が髪にさされていたかんざしをお抜きになって、これに彫りつけてある模様の桐竹鳳凰の文様を賜った。」（『昭憲皇太后基金創設一〇〇周年、特別基金のお願い』）と伝えられているが、皇后が人前でかんざしをお抜きになることは考えられない。

事務所で開催されて、社名を日本赤十字社と改称し、総裁、社長、副社長等を選出した。総裁は、小松宮彰仁親王が渡欧中であつたので有栖川宮熾仁親王が就任し、小松宮親王が一二月一九日に帰朝したので総裁を交代した。日本赤十字社では、博愛社時代の総長を総裁と読み替えて、初代総裁小松宮彰仁親王（当初、東伏見宮嘉彰親王）、二代総裁有栖川宮熾仁親王、三代総裁小松宮彰仁親王としている。

社長には佐野常民、副社長には大給恒と花房義質が就任し、幹事七人、常議員二〇人を選任した。社長、副社長は、公職があるので、日本赤十字社からは報酬が支払われなかった。

日本赤十字社の紋章

日本赤十字社の紋章（社紋）は、「桐竹鳳凰赤十字（鳳竹桐赤十字）」である。

紋章は、日本赤十字社に改称される直前の明治二〇年（一八八七）四月二十九日に「赤十字印章創定之儀」として決定された。鳳凰と桐と竹と赤十字の組み合わせおよび形は決裁で決められた。

含めて全国で正方形五つの組み合わせが使用されていた。

現在は、日本赤十字社有功章および彰記等には伝統の正方形五つの組み合わせによる赤十字が使用されているが、最近では桐竹鳳凰の中に広報宣伝に使用するロゴマークの赤十字（縦横の長さが幅よりも六分の一長い）が使われることが多い。

本来、ロゴマークは、赤十字のマークとともに、日本赤十字社、または Japanese Red Cross Society の文字を組み合わせで使用することになっている。紋章は、時代とともに変化していくことが予想される。

日本赤十字社有功章の制定



日本赤十字社有功章

日本赤十字社有功章は、明治二十一年（一八八八）に制定された。

勲章型の有功章は、銀製で「四条光線を配した中心円形内に鳳竹桐赤十字の図柄を配す。七宝を用いる。」とあり、中心に日本赤十字社の紋章と同様の文様が描かれている。裏面には、制定した「明治

二十一年 日本赤十字社」とある。

赤十字国際委員会から公認

明治二〇年（一八八七）九月にドイツのカールスルーエにおいて、第四回万国赤十字会議（赤十字国際会議）が開催され、政府からは陸軍軍医監石黒忠恵、日本赤十字社からは幹事松平乗承が参加した。二人は五月二九日にドイツの汽船で欧州へ向けて出航した。

松平乗承は、赤十字国際委員会に日本赤十字社の公認を要請する書簡を持参した。書簡は、佐野常民の自筆によるもので、五月二七日付で、墨で、日本語で書かれており、「ジュネーヴ府赤十字萬國（万国）中央社社長ギュスターヴモアニエー君貴下 日本赤十字社社長子爵佐野常民」となっており、佐野の名前の下に花押（サイン）がある。

ドイツ滞在中の陸軍一等軍医谷口謙は政府側に加わり、陸軍一等軍医森林太郎（森鷗外・森鷗外）は日本赤十字社側の通訳を務めた。森林太郎の会議記録の一部は日本赤十字社「赤十字情報ブラザ」に展示されている。

万国赤十字中央社社長ギュスターヴ・モアニエから九月二日付の公認したという書



博愛社事務所と博愛社病院（『日本赤十字社歴史叢談』所収）

簡は、一〇月一七日に日本赤十字社に届いた。

病院の設立と看護婦の養成

博愛社病院の設立と本社事務所

明治一九年（一八八六）、麹町区飯田町四丁目三一番地（現在、千代田区飯田橋三丁目）に博愛社病院と本社事務所が設立され、一月一七日に皇后陛下のご臨席をいただいて開院式が行なわれた。

明治一七年（一八八四）に陸軍卿大山巖に随行した橋本綱常は、各国の赤十字事業を調査して博愛社の将来のあり方について看護員の養成機関として病院を設けるべきであると提言した。

明治一八年（一八八五）十一月一二日に開催された社員総会で、総長小松宮親王は、橋本綱常の建議もあり、戦時救護の実業を挙げるために新たに事務所と病院を併設する必要があると演説した。

麹町区飯田町四丁目の建設予定地は、旧高松藩の上屋敷だったところで、陸軍省ご用地（官用地）になっており、明治一九年五月一五日に官用地拝借願いをして六月七日に陸軍省から許可を受け、さらに敷地の増拝借を願い出て許可された。

敷地は三千坪（約一万平方メートル）、事務所等は平屋造りで、病室は瓦葺木造二階建て六二床、そのほかに伝染病棟など合計一〇棟で、建築費一万四千八〇〇円、医療器械等備品費一千九〇〇円であった。

建物は新築のほか八棟の払下げを受けて再利用し、八月一六日に工事に着手して土地の拝借から病院の完成までわずか六か月間で一〇月末日に落成した。

明治一九年（一八八六）十一月四日に博愛社は東京府知事あてに私立病院設立願を提出して、十一月一日に許可された。

橋本綱常は、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長のま

ま初代病院長に就任し、副院長は陸軍省医務局第一課長で陸軍一等軍医正の石坂惟寛^{いかん}が就任した。当時、医員は慈恵の主旨により無給であった。

明治二〇年（一八八七）五月二〇日、博愛社は日本赤十字社と改称したことにより、病院も日本赤十字社病院に改称した。

J R 中央線・総武線飯田橋駅東口から徒歩五分程のところに、ホテル・メトロポリタン・エドモントがあり、その裏に大和ハウス工業株式会社がある。博愛社病院は、ホテルと会社の付近にあった。

日本赤十字社病院は、明治二四年（一八九一）に現在の渋谷区広尾に移転し、本社事務所は近くの飯田町六丁目に移転した。

病院と本社事務所が移転した後は、ここが甲武鉄道^{こうぶ}（現在のJ R 中央線）始発駅の飯田町駅になった。

ホテル・エドモントは、旧駅構内で、ホテルの裏にモニメントとして鉄道の線路があり、ホテルの裏にあるアイ・ガーデン・テラスの外階段を上って三階のところに「ゼロ・ポイント（線路の起点）」がモニメントとして復元されている。

また、ホテルの裏出口を出ると、高松藩の上屋敷があったことを示す石垣の一部が

遺構として保存されている。

看護婦の養成開始

日本赤十字社では、看護の専門知識を持つ女性の養成に力を入れることにした。

看護婦の養成は、明治三年（一八九〇）四月一日に飯田町時代の病院で開始された。前年の明治二二年（一八八九）六月一四日に看護婦養成規則を制定して、年齢は二〇歳以上三〇歳以下で、修業年限は一年半、卒業後二年間は日本赤十字社病院に勤務することになっていた。第一回生は四月に一〇人が入学して、第二回生は九月に五人が入学し、同時に京都、広島、愛媛各支部の委託生四人を入学させた。

第一回生は明治二四年（一八九一）一〇月に修学を終えて実務につき、半年遅れて入学した第二回生といっしょに明治二五年（一八九二）五月に渋谷の病院で卒業証書授与式が行なわれた。

大正九年（一九二〇）、ナイチンゲール生誕一〇〇年を記念して、第一回フローレンス・ナイチンゲール記章が授与され、日本からは萩原タケ、山本ヤヲ、湯浅うめの三人が受章している。



日本赤十字社病院
(『日本赤十字社報告 明治二十五年』所収)

原タケの胸像があり、台座に「人道のために国家のために」と刻まれている。

皇室から金一〇万円をいただいて渋谷に新病院を建築

飯田町にあった病院は、患者が急増して改築が必要になったことが天皇皇后にも達して、新しい病院建築のために皇室から金一〇万円が日本赤十字社に下賜された。明治二年（一八八八）一〇月二五日に金八万円（二年に四万円、二年に四万円）が下賜され、明治三年（一八九〇）七月一六日に二万円が追加で下賜されている。

加えて、皇室から南豊島御料地内の一部（現在の渋谷区広尾）九千四〇〇坪（約三万一千



萩原タケ胸像

萩原タケ（現在の東京都あきる野市出身）は、明治二六年（一八九三）に第七回生として入学した。萩原は、日清戦争後、日本赤十字社病院船「弘済丸」の看護婦長を勤め、明治四三年（一九一〇）に日本赤十字社病院看護婦監督に就任して、看護婦の養成と地位向上に努めた。

J R 立川駅から J R 武蔵五日市行きに乗ると、J R 拝島駅までは J R 青梅線^{おうめ}で、J R 拝島駅から J R 武蔵五日市駅までは J R 五日市線になる。青梅線は立川駅と奥多摩駅とを結んでおり、拝島駅は途中の駅になる。

武蔵五日市駅南口を出て右へ秋川街道を進むと、秋川街道は途中から右へ曲がり、真つすぐの道路は松原街道^{ひのはら}になる。松原街道を進むと、道路の左側に郵便局があり、さらに進むと信号と五日市出張所入口の表示がある。信号のところを右へ曲がつて進むと、あきる野市立五日市中学校があり、道なりに進むとすぐにあきるの市五日市出張所がある。庁舎に入る道路の左側に萩



日本赤十字社跡

「日本赤十字社跡」の石碑が建っており、「大正元年（一九一二年）に芝公園（現在の港区芝大門）に移転するまでここにありました。」とある。

口絵の明治時代の社屋は、本社事務所が飯田町六丁目に移転してからのものである。

日本赤十字社本社事務所の移転

本社事務所は、病院が渋谷に移転した後、明治二十七年（一八九四年）五月八日に飯田町六丁目（飯田橋四丁目）に移転した。明治四十三年（一九一〇年）十二月二日に日本赤十字社条例が公布されて、日本赤十字社は社団法人（現在は認可法人）になった。

（一九〇四年）に日本赤十字社三重支部山田病院（後、山田赤十字病院、現在の伊勢赤十字病院）が開設されたのを始め、同年には長野、大津に、明治三十八年（一九〇五年）には和歌山、明治四〇年（一九〇七年）には富山、高松にと次々に開設された。



日本赤十字社中央病院病棟（撮影：筆者、画像使用許可：博物館 明治村）

平方メートル）を拝借した。日本赤十字社病院は、皇室の援助によって完成した。病院の設計は、宮内省勤務の片山東熊（とうくま）が、ドイツのハイデルベルヒ（ハイデルベルク）大学病院を模して明治三二年（一八八九年）四月に着工して、翌三三年（一八九〇年）二月に完成し、明治三四年（一八九一年）五月一日に移転開院した。片山東熊は、迎賓館赤坂離宮（旧東宮御所）の設計者として知られている。

当時の日本赤十字社病院の病棟一棟は、愛知県犬山市にある博物館明治村に「日本赤十字社中央病院病棟」として保存されている。

病院は、昭和十六年（一九四一年）に日本赤十字社中央病院と改称し、昭和四十七年（一九七二年）に日本赤十字社産院と統合して日本赤十字社医療センターになった。

日本赤十字社支部病院は、明治三十七年

日本赤十字社篤志看護婦人会

明治二〇年（一八八七）五月一九日、有栖川宮熾仁親王妃殿下の提案により、有志の貴婦人が本社に集合して、六月二日に「日本赤十字社篤志看護婦人会」が発会した。日本赤十字社における奉仕者組織の誕生である。

幹事長は有栖川宮熾仁親王妃よりこ董子殿下、発起人は二九人で、小松宮親王が帰朝されると一二月に小松宮親王妃よりこ頼子殿下が幹事長の後を承けられた。軍医である足立寛が講師になって看護法を講習して、明治二一年（一八八八）六月二三日、第二回社員総会の際に皇后陛下の御前で三条治子侯爵夫人ほか七七人が最初の修了証を授与された。明治二二年（一八八九）には第二回として二四人が修了し、一三年（一八九〇）、二四年（一八九一）は看護婦の養成や病院移転のために中断して、二五年（一八九二）から講習が再開された。

日清戦争（明治二七・八年戦役）の際、明治二七年（一八九四）七月に二〇人の看護婦が初めて広島に到着すると、人々は白衣の観音とあざけり笑った。ところが、二八年（一八九五）の春に篤志看護婦人会の幹事長小松宮妃殿下、北白川宮妃殿下が患者

慰問のために広島を訪問され、人々が停車場（駅）に出迎えると白衣の姿で、その後、鍋島榮子（栄子）ながこを始め大山捨松すてまつらが白衣で広島に来られたので、人々は白衣の看護婦を尊敬するようになった。

京都支部からは、同志社大学創立者新島襄の八重子夫人も、看護婦取締として看護婦を引率して広島で活躍した。

第四章 日本赤十字社の活動

災害救護と戦時救護

最初の災害救護活動 磐梯山噴火における救護

明治二一年（一八八八）七月一五日午前七時四五分頃、福島県の磐梯山が噴火して、死者四七七人、負傷者五四人という被害が発生した。五色沼周辺の小沼群は、このときの噴火によって窪地に水がたまり誕生した。

当時、日本赤十字社には、平時救護の規則がなかったが、この惨状をお聞きになった皇后陛下（後の昭憲皇太后）は、七月一九日午後二時に吉井宮内次官を通じて日本赤十字社に救護班を派遣したらよろうとご内旨があつた。

日本赤十字社は、七月二〇日午前六時三〇分上野駅発の汽車で医員三人を派遣して、午後に福島県の郡山駅（こおりやま）に到着した。二時間ばかり費やして荷車を雇い、器材、薬品、繃帯材料等を積んで、翌二一日に猪苗代に到着して救護活動を開始した。現地では、地元の医者が治療に当たっていた。

日本赤十字社から派遣された医員は、治療所だけでなく、村落を廻つて救護活動を行なつた。

社長佐野常民も七月二四日に仙台から現地に赴き、負傷者を慰問して浴衣五〇反を贈るとともに、東京の有志者からの義援金五〇円を贈つた。

派遣した救護員数は、延べ一五人、取扱つた患者数は延べ一一三人と記録されている。



平時災害救護発祥の地記念碑

J R東北本線郡山駅（福島県郡山市）からJ R磐越西線（ばんえつさいせん）に乗り猪苗代駅で下車して、裏磐梯高原駅行きのバスに乗り、三〇分程で五色沼入口バス停の一つ前のアクティブリゾーツ裏磐梯（うらばんだい）（メルキュール裏磐梯）バス停に着く。メルキュール裏磐梯からまっすぐ西へ（主要道路でない道を）五分程行くと五色沼駐車場に着き、すぐ右側に「平時災害救護発祥の地」の記念碑がある。駐車場の奥のレストランの前を進むとすぐに毘沙門沼展望所があり、磐梯山を望むことができる。（ばんだいさん）

エルトゥール号の遭難救護

明治二三年（一八九〇）、オスマン・トルコ帝国（現在のトルコ共和国）の軍艦エルトゥール号は、日本国天皇にトルコの最高勲章を贈呈し、あわせて両国の友好を目的に来日した。

その帰路の九月一六日、台風に遭遇して和歌山県の紀伊大島（通称、大島）沖で座礁沈没して五八七人が死亡し、六九人が村民によつて救助され、ドイツ軍艦によつて神戸和田岬の消毒所の仮病院に搬送された。日本赤十字社では、医員二人、看護婦二人を派遣し、さらに事務員一人、薬剤員一人、看護婦二人、病院主任医員一人の計九

二二万二千五〇一棟という被害が発生した。

日本赤十字社では、渋谷に移転開院したばかりの病院から愛知県に医員二人、看護婦四人を、岐阜県に医員三人、看護婦六人、事務員一人を派遣し、さらに愛知県に医員三人、看護婦六人、調剤員一人を、岐阜県に医員二人、看護婦四人、調剤員一人を追加派遣した。日本赤十字社本部（本社）から岐阜県、愛知県両県に派遣した救護員数は、医員一〇人、看護婦二〇人、調剤員二人、事務員一人となり、看護婦の内一〇人は、明治二三年（一八九〇）四月に日本赤十字社の看護婦養成所に入學して一年半の教育を終え、一〇月に第一回生として卒業したばかりであった。

また、愛知支部（現在の愛知県支部）からは、医員一三人、看護婦一人を、京都支部（現在の京都府支部）からは、医員六人（医員三人、医員助三人）、事務員一人を派遣して、京都支部は死傷者が多い岐阜県の大垣（現在の太田市）で救護活動に従事した。

派遣した救護員数は、実数で医員二十九人（延べ三十一人）、看護婦二十一人、調剤員二人、事務員二人、合計五十四人で、愛知県で六か所、岐阜県で六か所の救護所で、一〇月三十一日から一二月九日まで活動し、取扱い患者数は実数四千一七六人、延べ一万一九四人であった。



平時国際活動発祥の地記念碑

人を派遣して九月二二日から一〇月二日まで一二日間、救護に当たった。

新大阪から特急「くろしお」に乗ると、三時間半でJR紀勢本線串本駅に着く。駅前からコミュニティバスで四〇分、車では一五分程で檜野^{かしの}にあるトルコ記念館に着く。

トルコ記念館には、エルトゥールル号の遭難に関する写真や物品が展示されており、その脇にトルコ記念館と日本赤十字社和歌山県支部による「平時国際活動発祥の地」の記念碑がある。トルコ記念館から檜野^{かしの}埼灯台の方へ行くと、大きな慰霊碑が建っている。

濃尾地震

明治二四年（一八九二）一〇月二八日午前六時、岐阜県、愛知県を中心に大地震が発生して、死者七千二十七人、負傷者一万一千一七五人、家屋の半壊

社長佐野常民、幹事松平乗承は、救護活動の視察と患者慰問で現地を訪問した。その後、各種の災害で救護活動が行なわれた。

日清戦争

明治二七年（一八九四）に始まった日清戦争では、日本赤十字社は、八月三日に東京から理事首長清水俊（本社幹事）、医長、医員、看護婦取締高山^{みつこ}盈子、看護婦二〇人の救護員三〇人を広島陸軍予備病院に派遣して八月五日に広島に到着し、六日に第一分舎（のちに第一分院）を担当した。看護婦を戦時救護に派遣した最初である。戦地から後送された傷者は、一七日に第一分舎に入院した。

また、戦地派遣第一救護員四一人は、九月二日に東京を出発して、九月八日に横浜丸で広島の宇品を出航、九月一二日に現在の韓国仁川市^{インチョン}に到着して病院仮舎を建設し、九月一七日に患者を収容して海外における戦時救護活動が開始された。

派遣された救護員実数（国内を含む）は、医員（医長等を含む）二〇四人、看護婦（看護婦取締等を含む）六四九人、看護人（看護人取締等を含む）四七五人、ほか六八人、合計一千三九六人（延べ一千五五三人）で、取扱い患者数は一〇万二千六七五人（清

国Ⅱ現在の中国Ⅱの傷病兵一千四八四人を含む）であった。

その後、北清事変（明治三三年）、日露戦争（明治三七・八年戦役）と日本赤十字社の戦時救護活動が行なわれた。

病院船

日本赤十字社は、日清戦争（明治二七・八年戦役）の経験から患者輸送船の必要性を感じ、明治三〇年（一八九七）に日本郵船株式会社と次のような内容の契約をした。

日本赤十字社は自己資金で病院船二艘を建造して日本郵船に引き渡す、日本郵船は製造費元価の二〇分の一ずつを無利息で日本赤十字社に納付する、平常は日本郵船が使用して戦時や日本赤十字社が必要と認めるときは速やかに日本赤十字社が使用できるようにするというものである。

明治三〇年（一八九七）一二月にイギリスのロブニッツ会社に注文して、スコットランドのグラスゴー郊外レンフリーで二艘の病院船を製造した。

全長九四・二メートル、幅一一・八メートル、総トン数二千六四〇トン、病床数二九二床、速力時速一五・四二ノット（二八・五キロ）、病室や手術室等を完備し、一

第五章 佐野常民と大給恒の晩年

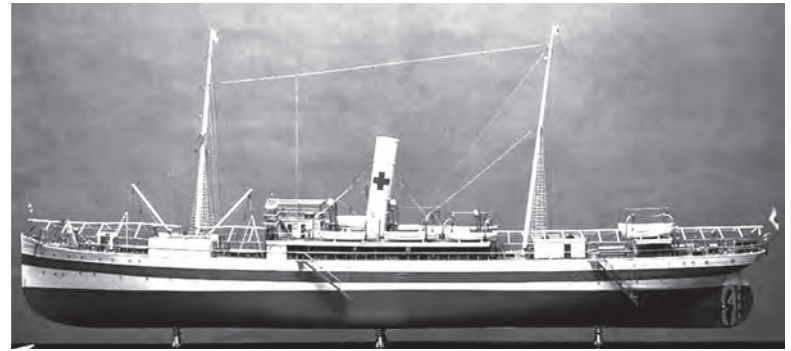
最後の出張と妹との再会

明治二九年（一八九六）、七五歳の佐野常民は、九州七支部と山口支部の社員総会（赤十字大会）に出席する四三日間の長い出張をした。同行した松平乗承が「八支紀行」として出発から帰京までを記録している（以下、「八支紀行」を参照）。

一〇月三二日午前七時過ぎ、佐野は松平乗承、岩崎駒太郎らと新橋停車場（駅）から汽車に乗った。副社長花房ほか本社の役員が見送った。

午前一〇時頃に箱根路にかかり（当時は、現在のJR御殿場線を経由していた）、夕方五時頃に浜松に着いた。

一月一日朝早く浜松を出発して夕暮れに琵琶湖を過ぎ、午後八時過ぎに神戸に到着した。佐野は、神戸に到着したときに、同行の松平に今日作ったと漢詩を示した。今回の出張と西南戦争の際に九州へ出張したイメージが重なって詠んだと考えられる。



赤十字病院船「博愛丸」模型（日本赤十字社所蔵）

艘五万四千ポンド、日本円にして五四万円、二艘で一〇八万円であった。

博愛丸は、明治三十一年（一八九八）一二月に竣工して翌年四月一〇日に横浜港に、弘済丸は明治三二年（一八九九）に竣工して同年六月二八日に横浜港に到着した。

病院船は、明治三十三年（一九〇〇）の北清事変に活躍し、日露戦争（明治三七・八年戦役、一九〇四・五）では、博愛丸と弘済丸の合計で一〇六回の航送、患者二万六千五三九人（内、俘虜^{ふりよ}六一三人）を取り扱った。任務を終えた病院船は、大正一五年（一九二六）に売却された。病院船「博愛丸」の模型は、日本赤十字社「赤十字情報プラザ」に常設展示されている。

【口絵の漢詩 読み】

遠く台旨を銜^{ふく}まんとして京城^{けいじょう}を發^はつせば、天^{てん}、前途^{ぜんす}を卜^うして好晴^{こうせい}を放^{はな}つ。
時^{とき}、変^かじて期^きし難^がければ謀^{はかりごと}預^{よめ}すべし、闔^{こう}国^{こく}を企^{こころ}図^ずして忠誠^{しゅうせい}を致^{いた}さん。

口絵の絹本（布）の末尾には「将^{まさ}に九州^{きゅうしゅう}に赴^{おも}むかんとして東京^{とうきょう}を發^{はな}するに作ることあり」とある。

【詩の内容】

遠く九州まで命を奉じて首都（東京）を出発すれば、天は前途を占つて晴れ上がった空を広げてくれる。

時世の変化は予期し難いものだから（我が）謀^{はかりごと}をご許可いただき、国全体を救う計画を立てて忠誠を尽くすのだ。

一月三日午後三時二〇分に池田（熊本県）に到着して、五日に行なわれた熊本の社員総会で、佐野は「熊本こそ赤十字の創業の地である。」と演説している。

六日、福岡に向かい、県境の大牟田で福岡支部副長（現在の副支部長）緒方道平（ウィー

ン万博でドイツ語の通訳および技術実習者、緒方貞子の祖父）らが出迎えた。七日午後に福岡の社員総会が行なわれた。

八日、鳥栖で汽車を乗り換えて、午後四時頃に佐賀に到着した。支部の関係者、社長^{社長}の親戚知人、社員（会員）、学校の生徒ら大勢が出迎えた。佐野は、まず、鍋島家の祖先および閑叟公（鍋島直正）をまつている松原神社に詣でた。九日は佐賀の社員総会。一〇日午後に有志者の園遊会が、閑叟公が愛された多布施川のほとりの神野のお茶屋（現在、佐賀市神園四丁目にある神野公園内に再建）で行なわれて、請われるままに演説をしたが、閑叟公のことばかりを話しながら涙にむせんだ。深い人間関係のつながりを知ることができる。

一日、学校や佐賀病院好生館を訪問した。佐賀病院好生館は、西南戦争の際にここから救護員を採用している。夕方、親戚知人を招いて宴を開き、二〇〇人ばかりが参加した。その中に、七〇歳位と思われる下村家から多久家に嫁いだ佐野の実の妹多久子がおり、終始、佐野の世話をしている。

一二日、佐賀を出発して、夜七時頃に長崎に着いた。一四日午後、長崎の社員総会。一五日、車に乗り一〇時半頃に茂木（長崎市茂木町）に着いた。博愛社創立時代

の長崎の医員深町亭、社長の妹、関係者にここで別れを告げて茂木港から筑後丸に乗って夜八時頃に米ノ津（鹿児島県出水市米ノ津）に着き、一七日午後三時過ぎに鹿児島に着いた。一八日に鹿児島島の社員総会、二二日に宮崎の社員総会、三〇日に大分の社員総会が行なわれた。

一二月五日は山口支部の社員総会で晴れてはいるが、夕べから降った雪で景色は真っ白になっていた。八日夕方に岡山に着く。

一〇日午前八時頃に汽車に乗り、社長は大阪へ、松平、岩崎は、西の宮停車場（兵庫県西宮市）で降りて博愛社創立当時に仮事務所を提供した旧尼崎藩主桜井忠興夫人錦子を訪ねて、午後一時頃に大阪に着いた。桜井錦子は、明治一〇年（一八七七）八月に徳川廣子（広子、旧紀州藩主徳川茂承夫人）が五〇〇円を寄附した直後に、さらしもめん晒木綿二五反を博愛社に寄贈している。

一日、午前五時頃に再び佐野社長と大阪から急行の汽車に乗り、夕方に静岡に着いた。一二日、午前五時四〇分発の汽車で一二時過ぎに東京に戻った。

八支部の社員総会に出席して帰京した翌日、総裁に随行して神奈川支部の社員総会に臨み、その翌日に皇居に参内して皇后陛下に九州巡回のことを報告した。

その後、間もなく、腸チフスにかかり、翌三〇年（一八九七）春には、一時、病床を離れることができたが、七月には病院船「博愛丸」「弘済丸」の設計、日本赤十字社創立二五年紀祝典の挙行に関して、当時、京都行幸中の天皇皇后両陛下に内奏するために同地に出張して海路帰京し、これより病床に親しむ人となった。

日本赤十字社創立二五年紀祝典

明治三〇年（一八九七）一〇月、佐野常民は七六歳で、明治三五年（一九〇二）の創立二五周年には八一歳になる。

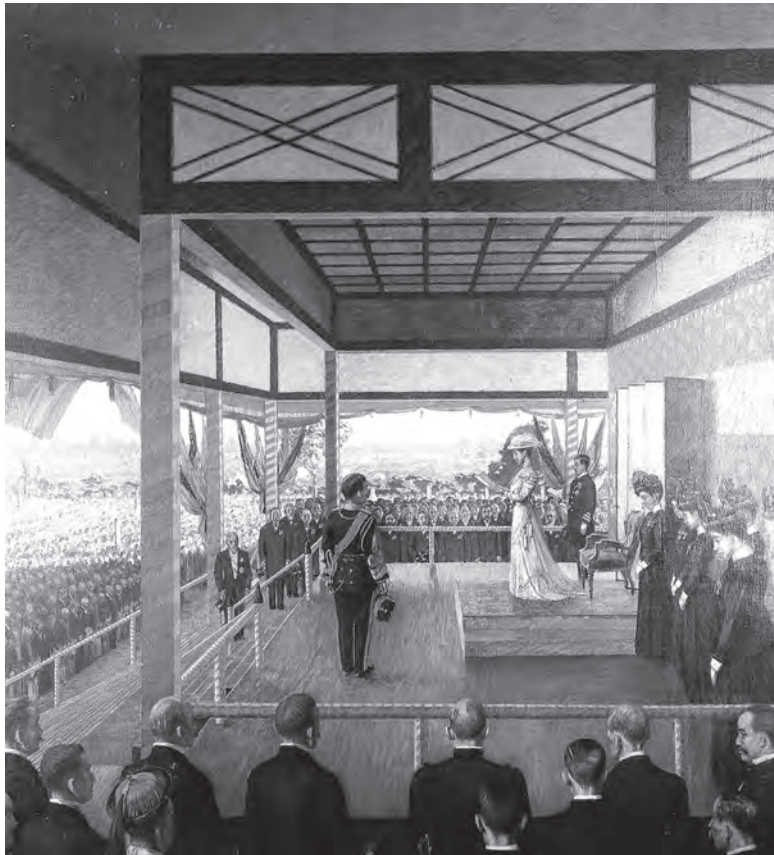
大隈重信は戯れて佐野に「二五年紀祝典に熱心なのはよいが、いくつまで生きられるのか。」と聞くと、佐野は「予は、なお数一〇年は生きているつもりである。」と答えた。

佐野常民の考え方や行動は年齢に関係なく、時には一〇年も先のことを考えて話すので、聞く人はそれを理解するのに苦労して答えがなくなるといふ具合であった。

明治三五年（一九〇二）は、五月一日に日本赤十字社創立二五周年の記念祝典を開催する予定であったが、六月にイギリスでエドワード七世と王妃アレクサンドラの戴冠式が行なわれることになり、総裁小松宮彰仁親王がこれに参列するために四月中旬に日本を出発した。戴冠式は八月九日に延期された。祝典は、小松宮親王の帰朝を待つて一〇月二一日に決められた。

明治三三年（一九〇〇）の北清事変もあつて、外国から来賓を招待しないで、皇族、大臣、在日の外国公使等を招待して、上野恩賜公園に特設の式場を設置し、中央に玉座を設けて金屏風を廻らし、紅白の幕や国旗、赤十字旗、外国旗を掲揚した。会場の上野公園は超満員の状態で、参加者には弁当の代わりにビスケット一箱ずつが配布された。

皇后陛下は、午前一〇時に上野公園内にある日本美術協会の便殿にご到着になり、総裁小松宮親王や、佐野社長、大給・花房副社長、理事の小沢武雄、松平乗承、平山成信、常議員の鍋島直大、石黒忠憲および博愛社時代から長年日本赤十字社に勤めた笠原光雄に創立以来の功労を称賛されて式場に向かわれた。佐野は、便殿で皇后に拝謁したが、健康を考慮して式典には参加しなかった。佐野常民、大給恒は、皇族以外で初めて日本赤十字社名誉社員になった。



赤十字社総会行啓
(湯浅一郎・聖徳記念絵画館所蔵)

佐野常民の人柄

中庸を愛読

佐野は、儒学の四書（論語、大学、中庸、孟子）のうち中庸を愛読し、「人一度にひとたびしてこれをよくすれば己はこれを百度ひやくたひし、人十度とたびにしてこれをよくすれば己はこれを千度せんたひす」「果たして、この道を能くすれば、愚といえども必ず明に、柔といえども必ず強なり。」を自分の信条として、人よりも努力を重ねれば必ず目的を達成できるという信念を持っていた。

漢詩

佐野は、漢詩を好んで「雪津せつしん」と号した。雪は佐野常民が冬の一二月に生まれたからであろうか、津は故郷の早津江津の津（港を意味する）と考えられる。

晩年には、漁叟ぎよそう（＝漁翁ぎよわう＝老漁夫）も使用している。関防印かんぼういん（書画の右肩に押す長方形の印）には、「松秀敷榮しょうしゅうえい＝松秀、榮を敷く」（松は冬の寒さにも耐えて色を変えず、草木は大いに茂る＝将来を見据えて邁進する自負を表す。）を使用している。

落款には、藤原氏の一族であるという意味で、姓印に時々「藤原」を使用している。揮毫きごう（書）を頼まれると「人様のお蔭で手習いができる。」と笑いながら絹地に向かった。

なまこのような人

大給恒は、佐野を評して「なまこのようだ。」と話している。その主旨は「たたいて、ひねつても、ひっぱつても、少しも変わらない。」ということ形容している。佐野は、社員（会員）を勧誘するときには、何度でも足を運んであきらめないで、ついに根負けをして加入してしまうという有様であった。また、決断したことについては、これを曲げることはなかった。

富士山

佐野が東京で長く住んだ高輪の別邸（現在の高輪四丁目、ブリリア高輪レフィール付近）からは、よく富士山が見えた。佐野は、茶室に座って遠く富士山を眺めるのが自慢で、雲が晴れて富士山が見えると歓喜して人の話が耳に入らなくなるので、客は

時々話を中断しなければならなかった。

別邸の庭には富士山と富士五湖に見立てたのであろうか、小高い丘陵と池があり、佐野は庭を散歩するのを楽しみにしていた。

客を喜ぶ

佐野は、来客を喜んだ。高輪の別邸を訪問して昼にかかると、必ず客に立派な食事が出されるので、石黒忠憲は、あるとき品川の停車場（駅）で弁当を買って持参し「今日は弁当を持参したから食事は結構です。」と断つても「社長として客をもてなしているのではない。伯爵が人と呼んでおいて、そのまま帰すのは礼儀に反する。あなたが弁当を持ってこようが、私の方では出さなければならぬのだから。」という具合であった。

また、地方出張の際には、時々、馬車や人力車から降りて、歩きながら左右の送迎者に挨拶をした。

喜寿の祝い

佐野常民は、喜寿の祝いに、和紙に一・五センチ位の大きさで「崧（喜）」の文字をたくさん書いて、一文字ずつ鋏で切り取り、親しい人に贈っている。

佐野は、その心境と米寿（八十八歳）に向かう氣力を詠んでいる。

七七になりける 年のくれに 従二位 常民

崧（喜）の文字は けふ（今日）にて 書き納め

いさや（いざや） とらむ 米（八十八）の山路に

交通事故

佐野常民の晩年の写真では、右手に杖をついている。

佐野は、元老院議長の六一歳のときに、桜田門の付近で馬車から振り落とされて、額と右大腿を負傷した。額の傷は直ったが右大腿は膝上で骨折して碎かれた。当時の馬車は、現在の自家用車のようなものであった。

主治医の池田謙斎が治療した結果、足の屈曲は四五度まで回復したが、まだ、普通

に移転した際にも、旧社屋の正面玄関前に置かれたが、戦時中に金属の回収によって
抛出し、その後、佐野常民の子息佐野常羽の計らいで彫刻家渡辺義知に依頼して大理
石の胸像が台座に設置された。大理石の胸像は、現在、渋谷区広尾の日本赤十字看護
大学の地下の図書室のロビーに保存されている。

昭和五二年（一九七七）、日本赤十字社創立一〇〇周年を記念して完成した現在の
社屋の正面玄関奥には、彫刻家高田博厚により、向かって右側に赤十字の創始者アン
リー・デュナン、向かって左側に佐野常民の胸像がある。落成式では、アンリー・デュ
ナンの胸像は、アンリー・デュナン記章を受章した元日本赤十字社本社青少年課長橋
本祐子^{さちこ}、佐野常民の胸像は、佐野常民の子孫が除幕した。

後継者を決める

佐野は、晩年、多病になり、しきりに後継者のことを心配した。文官ならば、松方
正義、武官ならば大山巖に後事を頼むことができれば安心だといっていたが、総裁小
松宮親王も後継者のことを心配して、松方正義に限ると自ら松方邸を訪問した。松方
正義は恐縮して「それならば、佐野伯爵が一〇〇歳の後は承知しましょう。」と引受けた。

しかし、晩年は外出ばかりでなく、自宅の応接室に客を迎えるときにも、右手に杖
をつき足をかばうようにして歩いた。

銅像の建立

明治三四年（一九〇一）、佐野常民が亡くなる前年、日本赤十字社常議員石黒忠恵の
主唱により、飯田町の本社正面玄関前の中庭に彫刻家大熊氏広と铸造家鈴木長吉の手
による等身大の銅像が建立された。大正元年（一九一二）に芝公園（現在の芝大門）



晩年の佐野常民（佐野家所蔵）

の歩行は困難で、毎日、二回以上入
浴して局部をもみ「いささか足の短
きを見るのみ」といわれ、歩行に支
障がない程に回復した。

佐野は「これ、予の自負の一つに
して、精神が確固ならばその目的を
達成することができる。」といってい
る。

総裁小松宮親王はもちろんのこと佐野も安堵したが、程なくして佐野常民が亡くなり、松方正義が第二代日本赤十字社社長に就任した。

夫唱婦随

明治三五年（一九〇二）一月一七日、駒子夫人が逝去した。佐野常民は、前年十二月より沼津海岸静浦に療養していた。夫人の訃報に帰京しようとしたが、医師にとめられて思いとどまり、葬儀当日、衣服をあらためて、旅寓に祭壇を設け、神饌を供えて霊をまつた。

佐野常民は、その年の暮れ、明治三五年（一九〇二）二月七日、日本赤十字社創立二五年紀祝典が無事に終了してから三年町の邸（国会議事堂の前、内閣府の付近）で生涯を閉じた。

佐野常民は、生まれた年も亡くなった年も駒子夫人と一緒に、ともに八一歳であった。

東京メトロ千代田線乃木坂駅、青山霊園方面出口を



佐野常民墓

出て階段を上り、少し右へ行き信号の歩道をわたって青山霊園へ行くと青山墓地中央があり、右（北）へ少し行くと東九通りの表示がある。その通りを少し入ると左側に佐野家の墓があり、墓前には日本美術協会と日本赤十字社から贈られた石灯籠があり、奥に常民と駒子夫人の墓が並んでいる。

（主な公職等）

明治一二年（一八七九）中央衛生会長、龍池会会頭（明治二〇年に日本美術協会の会頭）、明治一三年（一八八〇）大蔵卿（大臣に相当）、明治一四年（一八八二）元老院副議長、明治一五年（一八八二）元老院議長、勲一等旭日大綬章、明治一八年（一八八五）宮中顧問官、子爵、明治二十一年（一八八八）枢密顧問官、明治二五年（一八九二）農商務大臣、明治二八年（一八九五）伯爵、明治三五年（一九〇二）正二位、旭日桐花大綬章。

大給恒の人柄

芸達者

大給は、きざみ煙草が好物で、朝から夜まで手を離さない。また、尺八が得意で三味線や長唄、踊りもする。横笛（篠笛、明笛）も堪能で、酒後に座興で楽しむこともあった。

六〇歳になってから墨絵を習い始めて、梅一枝に漢詩を添えた画賛を多くの人に贈ったが、最初のうちはどう見ても掛軸にする気にならなかったと伝えられる。晩年は絵も巧みになっている。

漢詩

和歌や漢詩にも造詣が深く、「煙草のむひま」と題して詩歌に関する随筆を書いている。

号は、龜崖（きがい）、落款には龜崖、玉鉤を使用している。関防印には、杜甫の七言律詩「江亭」の中の「雲在りて、意、俱に遅し」（雲は空に浮かんでいるが、私の心も

雲のようにゆつたりとしている）から「雲在庵」（うんざいあん）の庵号を使用している。

口絵の画賛（絵に添えた漢詩）は、梅の花の絵に梅の花の漢詩を添えて、絵と詩が一体になった風雅さを表現している。

【口絵の漢詩 読み】

春色しゆんしよく尤も瀟洒しやうしやにして、野梅竹涯やばいちくがいに開く。

殊に憐れむ紙窗（紙窓）しそウの月、一朵いちだ吾が詩を寫（写）うつせしことを。

【詩の内容】

春の景色は今が一番清らかで、自生する梅が竹林の外れで花を開く。

なかでも心を動かされるのは、紙を張った窓を照らす月が、一枝の影を浮かび上がらせて、私の詩を写しているようだ。

また、絵の下には、二つの遊印が押してある。一つは、「瀛洲潜吏」（えいしゅうせんり）（神仙が住むという東方の島で、ひっそりと役人として生きる者という謙遜の自称）で、もう一つは「受

樸於天弗鑿以人^{ぼく}樸を天より受け、鑿^{うが}たずして以^すに人たり。」（天から与えられた本性^{ほんせい}に手などを加えなくても、人間はそのまま人間としての価値を持つ。）である。

病氣とのつきあい

大給恒は、若い頃に脚氣にかかり、その後、胃弱になり、晩年には腎臓病になつて
いるが、多くの功績により佐野常民と同じく伯爵となり旭日桐花大綬章を受章した。

大給恒の墓は、東京メトロ日比谷線広尾駅の広尾橋方面の出口を出て、交差点を広
尾商店街の方へ行き突き当たりの祥雲寺の墓苑にある。菩提寺は、祥雲寺の中にある
香林院で、墓は、旧筑前福岡藩主黒田長政の近くの高台の奥にある。生前、朝な夕な
に腰を下ろしていた愛用の大きな石は遺言に
よつて墓地に敷かれた。



大給恒墓

（主な公職等）

明治十一年（一八七八）賞勲局副総裁、明治一七年（一八八四）子爵、明治二八年
（二八九五）賞勲局総裁、明治二九年（一八九六）旭日大綬章、明治四〇年（一九〇七）
伯爵、明治四二年（一九〇九）枢密顧問官、明治四三年（一九一〇）旭日桐花大綬章。

第六章 昭憲皇太后基金

基金創設の経緯

明治四五年（一九一二）にワシントンで開催された第九回赤十字国際会議（当時、
万国赤十字總會）に際し、皇后陛下（後の昭憲皇太后）から、平時救護事業奨励基金
として、金一〇万円（現在の三億五千万円に相当）が国際赤十字（当時、万国赤十字
連合）に寄附された。

昭憲皇太后基金は、日本赤十字社社長松方正義から宮内大臣渡邊（渡辺）千秋あて
に申請をして実現したもので、『明治天皇紀』にも「正義（松方正義）の内請に基づく



昭憲皇太后
(筆者所蔵)

昭憲皇太后基金は、皇室や日本赤十字社、明治神宮等から増額の寄附が続けられており、令和七年（二〇二五）四月一日現在、同基金からの配分は一七五の国と地域（赤十字社、赤新月社）に累計二八億円相当にのぼっている。

国際赤十字・赤新月社連盟からなる国際赤十字昭憲皇太后基金合同管理委員会が管理し、基金はそのままにして、毎年、基金から生ずる利子の配分を昭憲皇太后のご命日に当たる四月一日に発表している。

ものにして」とある。

宮内大臣から日本赤十字社社長あての連絡は四月二〇日にあったが、日本赤十字社の代表団（派遣委員）五人は、三月二六日に横浜港から出航した後であった。当時、アメリカまでは船で二か月ばかりかかったもので、一行はハワイ、サンフランシスコ、ニューヨークを経由して、五月三日にワシントンに到着した。

五月四日、代表の副社長小沢武雄は、松方社長からの電報を受け取ると、開会前の五月六日に議長にこのことを議題に取り上げてほしいと要請した。

五月七日午後二時に開会すると、書記長エミル・シャリエール（フランス）は、「日本国皇后陛下から、平時における赤十字救護事業奨励基金として、万国赤十字連合に金一〇万円が寄付された。」と紹介した。会場は大喝采をもって迎えられた。

日本赤十字社の提議は五月八日に説明し、九日午前の会議で決議された。

アドール議長は、日本国皇后の名を冠すること等を提議して満場の同意を得たが、大正三年（一九一四）四月一日に皇后が崩御された。我が国では諡が使用されることを連絡して「昭憲皇太后基金」になった。

一〇〇年以上続いている国際人道基金の「昭憲皇太后基金」は、赤十字国際委員会、

御歌

明治四十一年（一九〇八）五月二十七日、皇后陛下は、日本赤十字社社長松方正義を宮中に召されて、御歌を日本赤十字社に賜わった。

日のもとの　うちにあまりて　いつくしみ

とづくに（外国）までも　およぶみよ（御代）かな

慈しみが、国内ばかりでなく外国にまで広がっているというもので、昭憲皇太后基金や赤十字の活動がそれを具現しているといえる。

それは、明治一五年（一八八二）六月二六日の社員総会で佐野が講義したように、赤十字がこのように盛大になることは文明の発展であり、佐野の願いでもあったと考えられる。

主要参考文献

【日本赤十字社所蔵書類】

日本赤十字社デジタルアーカイブズ、「赤十字情報プラザコレクション」から検索できます。未公開分は、順次公開予定。簿冊の旧漢字では検索できないことがあります。

『結社及び処務関係』 HAKI-001

『西南征討救護関係 其二ノ一』 HAKI-003

『西南征討救護関係 其二ノ二』 HAKI-004

『熊本、長崎支局日誌』 HAKI-005

『熊本支局社事要録』 HAKI-006

『長崎支局事務顛末書』 HAKI-007

『博愛社日誌』 HAKI-011

『博愛社報告原稿 其二ノ一』 HAKI-014

『博愛社報告原稿 其二ノ二』 HAKI-015

『岩倉具視提出 博愛社設立請願書一式』 HAKI-081

『有栖川宮提出 博愛社設立請願書一式』HAKI-079
 『博愛社設立にあたり文部省雇ドクトルシュルツ氏招く願』HAKI-046
 『故大給恒副社長自筆 岩倉具視宛救護費下付願』HAKI-034
 『西南戦争征討総督府付元老院書記官戸田秋成による博愛社社員総会報告草案』HAKI-049

『博愛社標章関係文書一式』HAKI-078
 『松平乗承自筆の西南戦争救護報告書』文書資料 A1-152
 『佐野常民演説筆録』HAKI-033
 『博愛社略記』HAKI-074
 『博愛社病院創設書類』文書資料 A1-245
 『看護婦養成史料稿』(日本赤十字社、一九二七)
 『日本赤十字社震災救護景況報告』(日本赤十字社、一八九二)
 『明治二十七八年役日本赤十字社救護報告』(日本赤十字社、一八九八)
 松平乗承「八支紀行」『日本赤十字』第五七号附録(日本赤十字発行所、一八九八)
 『博愛』第百十六号(佐野常民追悼号)(博愛発行所、一九二二)

『日本赤十字社史稿』(日本赤十字社、一九二二)
 『人道―その歩み 日本赤十字社百年史』(日本赤十字社、一九七九)

【伝記・記録】

日本赤十字社編『日本赤十字社長 伯爵佐野常民傳』(岩崎駒太郎、一九二二)
 榎本半重『大給龜崖公傳』(平田春行、一九二二)
 霞会館編纂『華族會館史』(霞会館京都支部、一九六六)
 『橋本綱常先生』(日本赤十字社病院、一九三六)
 『博愛社誕生 最後の尼崎藩主 櫻井忠興』(日本赤十字社兵庫県支部、一九八八)
 『昨夢録』(平山成信、一九二二)
 野中萬太郎『佛國行路記』(野中烏犀圓本店、一九三六)
 齋藤弔花『萩原タケ子の生涯』(春秋社、一九三六)
 緒方富雄『緒方洪庵伝』第二版(岩波書店、一九六三)
 深瀬泰旦『伊東玄朴とお玉ヶ池種痘所』(出門堂、二〇一一)
 呉秀三『華岡青洲先生及其外科』(思文閣、一九七二復刻)

今津健治編『田中近江大掾』（田中浩、一九九三復刻）
 大日向純夫・我部政男編『元老院日誌』第一卷（三一書房、一九八一）
 日本史籍協會編『熾仁親王日記』二（東京大學出版會、一九七六覆刻）

【地誌その他】

川俣久平『唐澤山神社創建誌』（佐野五郎、一九五五）
 慎斎（前澤敏（弘明）翻刻）『續撰 佐野記』（永楽屋書店、一九六六）
 柳田貞夫『佐野氏の系譜と佐野庄』（柳田貞夫、一九七九）
 塙保己一編・太田藤四郎編補『續群書類従』第六輯下（続群書類従完成会、一九九〇）
 『高崎市史』下（高崎市、一九二七）
 江田郁夫『下野の中世を旅する』（随想舎、二〇〇九）
 出居博『戦国 唐沢山城』（佐野ロータリークラブ、二〇一七）
 佐々木馨『執権時頼と廻国伝説』（吉川弘文館、一九九七）
 『越前百万石ものがたり〜福井藩祖結城秀康〜』（福井市立郷土歴史博物館編集・発行、二〇二四）

中野禮史郎編『鍋島直正公傳』第二編・第四編（侯爵鍋島家編纂所、一九二〇）
 『市報さが』八月一五日号（佐賀市、二〇〇三）
 大園隆二郎「山領主馬とその時代（二）（三）（四）」『新郷土』第五号・第六号・第七号（佐賀県教育庁文化課、一九七八）
 『好生館一八〇年記念誌』（佐賀県医療センター好生館、二〇一七）
 松平町史編纂委員会『松平町史』（豊田市教育委員会、一九七六）
 『大給松平氏と西尾藩』（西尾市資料館、二〇〇四）
 岩松要輔「西南戦争時における博愛社の初期活動について」『葉隠研究』第五四号（葉隠研究会、二〇〇四）
 参謀本部編纂課編『征西戦記稿』上中下（陸軍文庫、一八八七）
 黒龍會本部編輯『西南記傳』全六卷（内田良平、一九〇八・一九〇九・一九一一）
 河野弘善『西南戦争 延岡隊戦記』（尾鈴山書房、一九七六）
 林志津江訳・北里柴三郎「日本におけるコレラ（一八八七年）」『北里大學一般教養紀要』第二〇卷（北里大學一般教養部、二〇一五）
 ベルタ・リエド著、梓谷かおり訳『ガイド フリゲート・エルトウール』（トルコ記

念館、二〇一九)

榊井孝・森正尚『第二版 世界と日本の赤十字―世界最大の人道支援機関の活動』(東信堂、二〇一八)

日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』(山川出版社、一九九七)

【著書、寄稿】

佐藤雅紀『歴史探訪 日本赤十字社の創立』(日本赤十字社東京都支部、二〇〇〇)

佐藤雅紀「慈しみは国境と時代を越えて」『代々木』平成二二年春号・第五一卷二号

(明治神宮社務所・明治神宮崇敬会、二〇一〇)

佐藤雅紀「昭憲皇太后基金創設の経緯」『人道研究ジャーナル』Vol.1 (日本赤十字国際人道研究センター、二〇一二)

佐藤雅紀「政府も理解した『敵味方の区別なき救護』日本赤十字国際人道研究センター『人道研究ジャーナル』Vol.7 (東信堂、二〇一八)

佐野常光氏所蔵版『藤原姓佐野氏系圖(寫)』(佐藤雅紀、二〇一二)

著者紹介

佐藤雅紀 (さとう・まさのり)

昭和15年、岩手県生まれ。日本赤十字社(本社)奉仕課長、同中央血液センター企画研修部長、同東京都支部振興部長、東京都赤十字血液センター副所長などを歴任。退職後も嘱託・ボランティアとして長きにわたり赤十字の活動に携わってきた。



(撮影：2022年 日本赤十字社にて)

写真左から：
大給恒ひ孫 大給乗龍氏、
佐野常民ひ孫 佐野常具氏、
著者 佐藤雅紀氏

日本赤十字社の創立と赤十字ゆかりの地

2025年10月1日 第1刷発行

著者

佐藤雅紀

発行

学校法人日本赤十字学園 日本赤十字国際人道研究センター

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3 (日本赤十字看護大学内)

<https://www.jrc.ac.jp/ihs/>

デザイン・印刷

(株) McKenzie Media Japan

本書の内容の無断転載・複製を禁じます。©Masanori Sato, 2025, Printed in Japan

表紙：博愛社救護所の図 (日本赤十字社所蔵)



日本赤十字社

日本赤十字国際人道研究センター